

2020年9月9日

第1回
厚生労働省指定 臨床実習指導者講習会
(長崎県講習会)
報告書

2020年8月29日～30日
長崎大学
(長崎県長崎市)

一般社団法人 日本作業療法士協会

1. 講習会の名称：「厚生労働省指定臨床実習指導者講習会（都道府県講習会）」
2. 主催：一般社団法人全国リハビリテーション学校協会
一般社団法人日本作業療法士協会
公益社団法人日本理学療法士協会
3. 運営担当：一般社団法人長崎県作業療法士協会
4. 開催日：2020年8月29日（土）～ 8月30日（日）
5. 会場：長崎県長崎市 長崎大学
6. 主催責任者：
 - 高木邦格（一般社団法人全国リハビリテーション学校協会 理事長）
 - 中村春基（一般社団法人日本作業療法士協会 会長）
 - 半田一登（公益社団法人日本理学療法士協会 会長）
7. 運営責任者：沖 英一（一般社団法人長崎県作業療法士協会 会長）
8. 講習会世話人名簿（別添1）
9. 講習会参加・修了者名簿（別添2）
10. 講習会の目標（学修目標）

目的：作業療法臨床実習において、効果的な臨床実習を円滑に行うために必要な知識を習得し、指導方法を身につける

講義・演習テーマ	学修目標
講義1 理学療法士、作業療法士養成施設における臨床実習制度論 意義・目的・内容・仕組み	作業療法臨床実習をとりまく背景と臨床実習指導体制の変遷、作業療法教育における臨床実習の意義と目的、また作業療法臨床実習における到達目標、一般目標、行動目標について理解する
演習1 一般目標と行動目標	
講義2-1 臨床実習指導方法論① 学生の特徴と対応 対象者の捉えかた 臨床実習指導のあり方	作業療法臨床実習における実習指導者の役割、学生の現代気質と実習中の心の機微およびその対応方法について理解する。
講義2-2 臨床実習指導方法論② 見学・模倣・実施プロセスと 指導ポイント コーチング・ティーチング	作業療法参加型実習について、その指導形態、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の習得のための、見学—模倣—実施の指導ポイントおよびコーチング・ティーチングを活用した指導方法について理解する。
演習2 基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の見学・模倣・実施の実践	
講義3 臨床実習における管理・運営 臨床実習の基本構造、 ハラスメント、リスク管理、個人情報の保護	作業療法臨床実習における臨床実習施設と養成校の連携した指導体制、対象者の権利保障・安全性の確保のためのリスク管理、個人情報保護について理解する、また学生の適正な指導のためのハラスメント防止について、指導場面を想定し、その対応を学ぶ。
演習3 ハラスメント防止	
講義4 臨床実習における学生評価 教育評価の意義 学生評価とは 評価の側面と役割（OSCEの活用）	作業療法臨床実習における教育評価の意義、実習過程での診断的・形成的・総括的評価の内容、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の評価に関する実習指導者と教員の役割、また種々の評価手法、特にOSCE活用の特長を理解する。さらに問題学生への対応方法について議論し学ぶ。
演習4 臨床実習における学生評価 重点ポイントの整理、実習遂行が困難な学生への対処法	
講義5 職業倫理および連携論 多職種連携・チームワーク論・卒後教育との関連	作業療法臨床実習を円滑に実施するために、倫理観にもとづいた多職種によるチーム連携について理解する。また卒後教育との関連について理解する。
演習5 多職種連携	
講義6 臨床実習指導方法論③ 生活行為向上マネジメント（MTDLP）	MTDLPを活用した作業療法の臨床実践課程を概観し、作業療法参加型臨床実習におけるMTDLPの活用の仕方を学習し、その特徴を理解する。
演習6-1 MTDLPによるマネジメント過程の実践	
演習6-2 事例報告書の作成 事例報告書の作成指導・報告の仕方 臨床思考過程の理解と指導	臨床思考過程を踏まえた明確な事例レポート作成の意義・目的を理解する。
演習7 作業療法参加型臨床実習の理解 作業療法参加型実習のあり方 臨床実習プログラムの立案	見学—模倣—実施の指導方法について、実践場面を想定した演習を行い、作業療法参加型臨床実習の理解を深め、効果的な臨床実習のプログラムを検討し立案する。

11. 講習会のプログラム表

<1日目>

時間	講義内容	主担当
9:20~9:30	開会 オリエンテーション (講習会の進め方)	井戸
9:30~10:00 (30分)	講義1 理学療法士、作業療法士養成施設における臨床実習制度論 意義・目的・内容・仕組み	荒木
10:00~11:00 (60分)	演習1 一般目標と行動目標	荒木
11:00~11:05 (5分)	休憩	
11:05~12:05 (60分)	講義2-1 臨床実習指導方法論① 学生の特徴と対応 対象者の捉えかた 臨床実習指導のあり方	福島
12:05~13:05 (60分)	講義2-2 臨床実習指導方法論② 見学・模倣・実施プロセスと指導ポイント コーチング・ティーチング	中村
13:05~13:10	休憩	
13:10~14:40 (90分)	演習2 基本的態度・臨床技能・臨床の思考過程の見学・模倣・実施の実 践	牧野
14:40~14:45	休憩	
14:45~15:15 (30分)	講義3 臨床実習における管理・運営 臨床実習の基本構造、ハラスメント、リスク管理、個人情報保護	桑原
15:15~16:15 (60分)	演習3 ハラスメント防止	桑原
16:15~16:20	休憩	
16:20~17:20 (60分)	講義4 臨床実習における学生評価 教育評価の意義 学生評価とは 評価の側面と役割 (OSCEの活用)	東
17:20~18:50 (90分)	演習4 臨床実習における学生評価の実際 重点ポイントの整理および実習遂行が困難な学生への対処法	東

<2日目>

8:45~9:15 (30分)	講義5 職業倫理および連携論 多職種連携・チームワーク論、卒後教育との関連	末武
9:15~10:15 (60分)	演習5 多職種連携	末武
10:15~10:20	休憩	
10:20~11:20 (60分)	講義6 臨床実習指導方法論③ 生活行為向上マネジメント (MTDLP)	村木
11:20~12:50 (90分)	演習6-1 MTDLPによるマネジメント過程の実践	村木
12:50~12:55	休憩	
12:55~14:25 (90分)	演習6-2 事例報告書の作成 事例報告書の作成指導・報告の仕方 臨床思考過程の理解と指導	丹羽
14:25~14:30	休憩	
14:30~16:00 (90分)	演習7 作業療法参加型臨床実習の理解 作業療法参加型実習のあり方 臨床実習プログラムの立案	丹羽
16:00~16:05 (5分)	閉会・事務連絡	

*尚、演習は世話人全員がファシリテーターとなり実施致しました。

演習2と演習6-1は昼食を取りながら実施致しました。

12. 演習内容

(学修目標、発表の要点、グループワークで議論された内容、感想)
グループ数：10グループ

会場風景

Web開催のため添付写真はありません。

- ① 演習1 一般目標と行動目標
- ② 演習2 基本的態度・臨床技能・臨床の思考過程の見学・模倣・実施の実践
- ③ 演習3 ハラスメント防止
- ④ 演習4 臨床実習における学生評価の実際
- ⑤ 演習5 多職種連携
- ⑥ 演習6-1 MTDLPによるマネジメント過程の実践
- ⑦ 演習6-2 事例報告書の作成
- ⑧ 演習7 作業療法参加型臨床実習の理解

演習 1

一般目標と行動目標

報告書：演習1 一般目標と行動目標

グループ 1 世話人氏名： 桑原由喜

GW 司会者： 朝永耕平

記録者： 宮腰昇

発表者： 吉崎一樹

学修目標

作業療法臨床実習をとりまく背景と臨床実習指導体制の変遷、作業療法教育における臨床実習の意義と目的、また作業療法臨床実習における到達目標、一般目標、行動目標について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 共に学ぶ姿勢を持つ
2. お互いにコミュニケーションを図る
3. 対象者の人間性や背景を知る

グループワークで議論された内容

<臨床実習で何を学んで欲しいと思っている点>

- 患者さんとのかかわり方（指導者も実習生と共に学んでいく）
- 学生が困っている事、不安な面をしっかり聞いて一緒に考える、考えた事を確認するなどを通してコミュニケーションの取り方を重点的に考えている
- 社会人としてのマナー（挨拶、気配り等）、コミュニケーション、学校ですでに学んだ評価など
- 社会人としてのルールを学ぶ、知識面を求めるよりも作業療法の流れを感じ取ってほしい
- 訪問リハビリは見学になることが多いが、特に重度な方の自宅生活の方法などを見て感じてもらいたい。
- 授業で習ったことを当てはめるのではなく疾患が同じでも背景や人間性を知り、そのうえで作業療法ができることを考えられるようになってほしい。
- 患者さんとのコミュニケーションの方法、セラピストの考え方など（学生と一緒に学ぶ）

感想

学生の考え方を聞き、バイザーの視野を広げる機会にしたい。
知識以上に人との関わり方を重要視していると感じた。
他の受講者の意見を聞き、同じ意見や悩みがあること、考え方の幅を学べた。

報告書：演習1 一般目標と行動目標

グループ 2 世話人氏名： 中村 和也

GW 司会者： 徳成 慧吾 記録者： 山口 数友樹 発表者： 勝元 笑利奈

学修目標

作業療法臨床実習をとりまく背景と臨床実習指導体制の変遷、作業療法教育における臨床実習の意義と目的、また作業療法臨床実習における到達目標、一般目標、行動目標について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 患者様に対してのみでなくスタッフ（同職種や多職種）に対しての円滑なコミュニケーションについて学んでもらいたい。
2. 養成校で学んだ知識と臨床に必要な知識をすり合わせることができる。
3. OT の特性について知り OT として何をしたいかを考える機会を持つ。

グループワークで議論された内容

<臨床実習で何を学んで欲しいと思っている点>

- ・学校の教科書で学んだ知識を具体的に現場で話題にしてもらえたら。
- ・実際に患者との基本的なコミュニケーションを学んでもらいたい。
- ・教科書で学んだ部分と臨床の差を感じてもらいたい。
- ・評価について実際に患者さんを通して学んでもらいたい。
- ・多職種と OT の違いや、OT の強み、OT として何が出来るかを学んでもらいたい。
- ・患者だけでなく同職種スタッフや多職種とのコミュニケーションを通して専門職について知ってもらいたい。
- ・リーズニングの方法や OT としての基本的な考え方を学んでもらいたい。

感想

知識や技術だけでなく、コミュニケーション能力など社会性についても学ぶ機会にしてもらいと感じました。

報告書：演習1 一般目標と行動目標

グループ 3

世話人氏名：牧野航

GW 司会者：出口夏代子

記録者：川口幹

発表者：川口徹

学修目標

作業療法臨床実習をとりまく背景と臨床実習指導体制の変遷、作業療法教育における臨床実習の意義と目的、また作業療法臨床実習における到達目標、一般目標、行動目標について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. OTの魅力
2. 社会性（挨拶、コミュニケーションなど）
- 3.

グループワークで議論された内容

<臨床実習で何を学んで欲しいと思っている点>

作業療法の楽しさ

関わることでの対象者の変化

他者、他職種との関わり方

業務の流れ

OTや仕事のやりがい

OTがどんなことをしているか、役割

社会性（挨拶、人との関わり方、報連相）

他職種とのコミュニケーション技術・方法

対象者と接することの楽しさ

感想

OTである前に社会人であることを学ぶことが重要。加えて、作業療法の魅力を感じてほしい。そのためには、私たち指導者側が魅力あるOTでいること、言葉や態度で作業療法の魅力を伝える力を高めることが必要であると感じた。

報告書：演習1 一般目標と行動目標

グループ 4 世話人氏名：鎌田秀一

GW 司会者：桑原小牧

記録者：馬場大地

発表者：平川拓視

学修目標

作業療法臨床実習をとりまく背景と臨床実習指導体制の変遷、作業療法教育における臨床実習の意義と目的、また作業療法臨床実習における到達目標、一般目標、行動目標について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. コミュニケーション
2. 多職種連携
3. OTとしての業務

グループワークで議論された内容

<臨床実習で何を学んで欲しいと思っている点>

- 1) 患者さんとのコミュニケーション
 - ・実際に実習で関わる中で学内では学べない患者さんとの意思疎通の仕方、声かけ
- 2) 多職種との連携
 - ・一人の患者さんに介入していく中で、入院から退院までの関わり方
- 3) OTの業務
 - ・カルテ記載、病棟との連携
- 4) リスク管理の習得
- 5) 疑問に感じたことを具体的にすることを学んでほしい
 - ・考えることを学んでほしい

感想

臨床実習では学生への指導だけでなく、学生の質問や疑問から指導者の学びに繋がることもあり、指導者のスキルアップにもなる。
患者さんと直接関わる場になるため、適切な距離感で学生が患者さんに寄り添うことができるよう支援することが大切である。

報告書：演習1 一般目標と行動目標

グループ5

世話人氏名： 田中悟郎

GW 司会者： 5-1:串間慎吾

記録者：5-2 定村千穂

発表者：5-3:原口貞也

学修目標

作業療法臨床実習をとりまく背景と臨床実習指導体制の変遷、作業療法教育における臨床実習の意義と目的、また作業療法臨床実習における到達目標、一般目標、行動目標について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 臨床実習で学んでほしいこと
- 2.
- 3.

グループワークで議論された内容

<臨床実習で何を学んで欲しいと思っている点>

- ・学生は何もわからない状態で実習にくるので、身体障害分野の概要と施設の特色を学んでほしい。
- ・維持期：対象者の生活歴を把握した上でかかわる点。
- ・小児分野：その子特有の特性に配慮するなどの心構え。
- ・認知症病棟：患者との接し方、コミュニケーション、距離の取り方、監察の仕方、人間関係など。
- ・学校で学んだことを現場で照らし合わせてほしい。
- ・発達障がい分野：やりがい、おもしろみ、ご家族や地域とのつながりも。
- ・精神科：患者とのやりとりの中で、自分のことや自分の心の動きを知ってほしい。

感想

各領域からの様々な意見が聞けて参考になった。
ネット接続への不安があったが、グループワークでは意見交換できた。
離島からはオンライン研修会は参加しやすくよかった。

報告書：演習1 一般目標と行動目標

グループ 6 世話人氏名： 東登志夫

GW 司会者：草野嵩一郎 記録者：下田莉華子

発表者：岩本泰幸

学修目標

作業療法臨床実習をとりまく背景と臨床実習指導体制の変遷、作業療法教育における臨床実習の意義と目的、また作業療法臨床実習における到達目標、一般目標、行動目標について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. コミュニケーション
2. OT としての楽しさ
3. 患者様への尊敬の念

グループワークで議論された内容

<臨床実習で何を学んで欲しいと思っている点>

- ・患者様とのコミュニケーションを取りながら生活状況を把握すること
- ・知識をつける為の積極性（学ぶ姿勢）
- ・OT としての楽しさ
- ・どのような生活に戻りたいのかのゴール設定のたて方（生活状況を把握した上で）
- ・知識を持って帰って次の実習にも活かす
- ・時間の使い方
- ・患者様への尊敬する気持ち
- ・社会人としての基本的態度

感想

臨床実習で何を学生に学んで欲しいかを共有できた。臨床実習では患者様と接する貴重な機会なので積極的にコミュニケーションを取りながら、OT としての楽しさや社会人としての基本的な態度を学んでほしいと思う。

報告書：演習1 一般目標と行動目標

グループ 7 世話人氏名：徳永 瑛子

GW 司会者： 今池大樹

記録者： 野口歩愛

発表者： 大谷幸己

学修目標

作業療法臨床実習をとりまく背景と臨床実習指導体制の変遷、作業療法教育における臨床実習の意義と目的、また作業療法臨床実習における到達目標、一般目標、行動目標について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 社会人としての行動、対応などのスキルを身に付けてほしい
2. コミュニケーション能力を身につけてほしい
3. 学校で学んだことを実際に臨床で実際に実践して 学んでほしい

グループワークで議論された内容

<臨床実習で何を学んで欲しいと思っている点>

- ・OT としての考え方を身に付けてほしい
- ・コミュニケーション能力を身に付けてほしい
- ・社会人としての立ち振る舞いや行動などのスキルを身に付けてほしい
- ・OT として、利用者の一人一人の環境因子、個人因子を考えられるようになってほしい
- ・様々な疾患の知識を身に付けてほしい
- ・基本的な評価を実際に患者様に実践してほしい
- ・患者様への姿勢、対応を身につけてほしい
- ・ただ見るだけにならないように疑問を持って実習に臨んでほしい
- ・対象者個人の特性を把握できるようになってほしい
- ・全体像をとらえてほしい
- ・患者様の目標をより具体的にとらえてもらいたい
- ・学校で学んだ知識の必要性を学んでほしい
- ・「報連相」ができるようになってほしい
- ・学生自身の目標や行動を達成できるようになってほしい

感想

臨床実習を通し、今後、社会の一員として働くために様々なことを学んでほしいと思った。それに加えて作業療法士として対象者の全体像（病気だけでなく人柄など）を捉えることを学んでほしいと思った。

報告書：演習1 一般目標と行動目標

グループ 8 世話人氏名： 田中剛

GW 司会者：荒木泰斗 記録者：橋口裕樹

発表者： 橋口裕樹

学修目標

作業療法臨床実習をとりまく背景と臨床実習指導体制の変遷、作業療法教育における臨床実習の意義と目的、また作業療法臨床実習における到達目標、一般目標、行動目標について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 患者様、家族とのコミュニケーション
2. 学校で学んだことと現場での差
3. 学生の学ぶ姿勢

グループワークで議論された内容

<臨床実習で何を学んで欲しいと思っている点>

学校で学んだことと現場との差

円滑なコミュニケーション

患者様との距離感

学校で勉強したことを現場で落とし込み

情報収集のやり方

患者様、家族との関係作り（苦手な学生が多い）

バイザーとの関係性作り

疑問点がうまく伝えられない学生がいるので相談の仕方の指導

社会性の獲得

治療の目的の理解

広い視点で患者様を見てほしい

カルテから情報を読み取るなど、情報収集の仕方

感想

先生方からの意見は共通しており社会性の獲得や患者様やご家族様との関係作りを円滑に行って欲しいとのことであった。

また学校で学んだ知識と現場で体験することの差を経験すること、コミュニケーションスキルが低い学生も多いためその部分も学んでほしいとの意見が出ており共感できた。

報告書：演習1 一般目標と行動目標

グループ 9 世話人氏名：井戸 佳子

GW 司会者：植木 百合子 記録者：秀嶋 沙季 発表者：本田 敏也

学修目標

作業療法臨床実習をとりまく背景と臨床実習指導体制の変遷、作業療法教育における臨床実習の意義と目的、また作業療法臨床実習における到達目標、一般目標、行動目標について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. コミュニケーション能力
2. 学校と臨床のギャップ
3. OT 業務の一連の流れ

グループワークで議論された内容

<臨床実習で何を学んで欲しいと思っている点>

- ・なぜそのよう考えたのか（現象を分析する力）
- ・多職種との関わり方
- ・患者さんとの関わり方
- ・評価、治療などの一連の流れ
- ・指導者と学生と一緒に考えながら実習を進めていく
- ・”OTはこんなことができるのか”という発見
- ・学生は知らなくて当たり前と考える
- ・教科書と臨床の違いやADL場面などを学んでほしい
- ・OT場面だけでなく、多職種との関わりや業務全体を見てほしい
- ・施設、在宅、地域へと繋げていく流れを学んでほしい
- ・多くの患者さんと接し、コミュニケーションや関係づくりを学んでほしい
- ・社会性を養う

感想

治療の流れなどのOT場面だけでなく、多職種との連携や他のOT業務などを見せていくことも大切であることを感じた。

報告書：演習1 一般目標と行動目標

グループ 10

世話人氏名： 丹羽 敦

GW 司会者：中島輝

記録者：田崎美智

発表者：齋藤将司

学修目標

作業療法臨床実習をとりまく背景と臨床実習指導体制の変遷、作業療法教育における臨床実習の意義と目的、また作業療法臨床実習における到達目標、一般目標、行動目標について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 社会性
2. コミュニケーション
3. 臨床推論（思考過程）

グループワークで議論された内容

<臨床実習で何を学んで欲しいと思っている点>

- ・住宅・生活に合わせた評価がどういう風に行われているか、何ができるのか見学を行ってもらおう。模倣し、理解してもらおう。全体的にかかわる方法を理解して帰っていただく。
- ・症例の心身状態に合わせた評価
- ・多職種との連携、説明の仕方、Fa に対してのリハ状況の説明
- ・社会性を学んでほしい、TPO に合わせた対応を学んでほしい
- ・挨拶
- ・患者様一人ひとりのニーズを把握するためのコミュニケーション
- ・臨床でしか学べないこと
- ・行動に責任が伴うこと
- ・本人の思いをくみ取ることの大切さ
- ・精神科：行動一つに意味があること、レクリエーションの実技や評価
- ・急性期：座学で学んだことを現場で見えて確かめる
- ・患者様、家族、スタッフ（OT、多職種）とのコミュニケーション
- ・自分が考えていることを説明できるようになってほしい

感想

社会性を学んでもらいながら様々な方とのコミュニケーションを取ってほしいと全員の意見が一致。実習での学びに繋げてほしい。それぞれ違う分野からの意見が聞くことができ考えさせられた。

演習 2

基本的態度・臨床技能・臨床思考
過程の見学・模倣・実施の実践

報告書：演習 2 基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の見学・模倣・実施の実践

グループ 1 世話人氏名： 桑原 由喜

GW 司会者： 岩永 裕人 記録者： 犬塚 祥子 発表者： 江崎 祐介

学修目標

作業療法参加型実習について、その指導形態、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の習得のための、見学-模倣-実施の指導ポイントおよびコーチング・ティーチングを活用した効果的な指導方法について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 学生が自分の課題を理解しやすい
2. 指導者側の説明スキルや情報を整理できる
3. 時間と指導者側の能力が求められる

グループワークで議論された内容

<「作業療法参加型実習」を実際に行っていく上で考えられるメリットと課題>

メリット

- ・学生が1人だけではなく複数の患者様を見る事ができる、一緒に考えることができる。
- ・コーチングでポイントを説明するので患者さんに関わり易いのではないかと思う。その都度指導を受ける事で自分の課題を理解しやすい。
- ・学生が今何を考えているのかわかりやすい、課題が明確となりやすい。リアルタイムでの指導が出来ているので学生もわかりやすく、実践に移しやすい。患者側も指導しているところをみているので、学生に対する不安も少ない。
- ・1回では理解できない学生も理解しやすい。また繰り返すので学生自体も出来るようになった点と出来ない点を把握しやすい。
- ・技能単位では学生も理解しやすい。学生に毎回確認しながら行えるので学生本来の能力も把握しやすい。
- ・学生に説明することで指導者の説明スキルがあがるだろう。
- ・リアルタイムで指導できる。

課題

- ・フィードバックの時間をどう取るか、学生が見学から模倣段階へ移行出来ない場合の対処
- ・自分の考えが出ない学生さんがいると思われるので、こちら側が話を引き出すスキルも必要
- ・説明の時間を臨床で実際に確保できるのか
- ・時間がかかる分、どれだけの技能単位を行うことができるのか

感想

動画を見ると丁寧でいいと思いましたが、見せて・させる事をどのように臨床で行っていくか工夫が必要で今後考えていかないといけないと思いました。
指導者としての質が問われると思いました。

報告書：演習 2 基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の見学・模倣・実施の実践

グループ 2 世話人氏名：中村 和也

GW 司会者：吉村 梓

記録者：勝元 笑利奈

発表者：岩本 悠

学修目標

作業療法参加型実習について、その指導形態、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の習得のための、見学-模倣-実施の指導ポイントおよびコーチング・ティーチングを活用した効果的な指導方法について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 学生にとっては課題がわかりやすい。
2. 実習指導者も学生とコミュニケーションを図りやすい。
3. ハプニングが起きた際に対応が難しく、計画通りにいかないこともある。

グループワークで議論された内容

＜「作業療法参加型実習」を実際に行っていく上で考えられるメリットと課題＞

メリット

- ・学生が事前に準備をすることができる。
- ・実際に患者さんに演習をしながら解説ができるため学生の理解も高まる。
- ・模倣の際に指導者も参加しているため、患者さんにも学生にも安心ができる。
- ・本当に理解できているのか確認できるため、指導者もわかりやすい。
- ・同じものに対して経験を重ねていくことができる。

課題

- ・丁寧に学生に教えているため、患者さんが少し置き去りになるのではないか。
- ・一つの課題に時間がかかるため、たくさんの課題の経験が可能なのか。
- ・続けて課題をしていくことと患者さんの治療のタイミングが合っているのか。
- ・ハプニングが起きたとき、計画的にいかず実施できないこともある。
- ・ハプニングが起きた時の想定もしておく必要がある。

感想

学生は、事前に準備できるため模倣や実践もスムーズに行えると感じた。また、学生とのコミュニケーション時間が増えるため、学生がどこまで理解出来ているのかが把握しやすいのではないかと考える。しかし、計画通りに行うが故にハプニングが起こったときに対応が難しいのではないかと感じた。

報告書：演習 2 基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の見学・模倣・実施の実践

グループ 3 世話人氏名：荒木 一博

GW 司会者：川口 幹 記録者：出口 夏代子

発表者：川口 徹

学修目標

作業療法参加型実習について、その指導形態、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の習得のための、見学-模倣-実施の指導ポイントおよびコーチング・ティーチングを活用した効果的な指導方法について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 学生が安心して学ぶことができる
2. 指導者の学びも多い（評価内容、コミュニケーション、環境設定等）
- 3.

グループワークで議論された内容

＜「作業療法参加型実習」を実際に行っていく上で考えられるメリットと課題＞

メリット

- ・丁寧
- ・セラピストの姿勢が学べる
- ・指導者も勉強になる（評価内容や伝え方等）
- ・どのレベルの学生でも実施しやすい
- ・学生が疑問を尋ねやすい
- ・臨床で活かすことができる
- ・学生の不安や緊張を軽減できる

課題

- ・時間がかかる
- ・学生の主体性、考える力を発揮しにくい
- ・対象者への負担が大きい
- ・対象者が限られてくるのでは（認知症や発達障害等は難しい）
- ・訓練環境や場面設定が重要

感想

対象者との信頼関係も必要となってくると思った。指導者も復習になり、学生も質問しやすい環境であると感じた。臨床に出てからもすぐに実践できると感じた。

報告書：演習 2 基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の見学・模倣・実施の実践

グループ 4 世話人氏名：鎌田 秀一

GW 司会者：馬場大地 記録者：石本昭仁 発表者：平川拓視

学修目標

作業療法参加型実習について、その指導形態、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の習得のための、見学-模倣-実施の指導ポイントおよびコーチング・ティーチングを活用した効果的な指導方法について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 学生、患者の理解はしやすい。
2. フィードバックする時間をどう確保するか。
- 3.

グループワークで議論された内容

<「作業療法参加型実習」を実際に行っていく上で考えられるメリットと課題> メリット

- ・一つ一つ丁寧に確認でき、学生の立場ではわかりやすい。
- ・その日のうちにフィードバックし、次の実習に活かせる。
- ・模倣する前にバイザーが実施しているのを見学できるのが良い。
- ・説明しながらバイザー、患者さん本人も理解しやすい。
- ・繰り返し行えるため学生は理解しやすい。
- ・訓練の目的、方法など確認して介入するため良い。

課題

- ・時間がかかる。
- ・何度も行なうため患者の負担になる。
- ・バイザーのスキル、教え方等により学生の理解度が変わる。
- ・教える側が時間をどうやって作るか考える必要がある。
- ・専門用語、分かり易く伝える方法スキルを磨く必要がある。
- ・ADHD など疾患により、介入中に説明することが難しい場合がある。

感想

実習生にとって、「課題」が少なくなるが、指導者としての「スキル」が求められる様に感じる。実際に、作業療法参加型実習の指導方法の指導を OJT の場面で行う機会があるとイメージがより具体的に湧きやすい。（分野別）

学生・患者にとって有益となるよう指導者として知識・技術を再度勉強し直すことが必要と感じた。

報告書：演習 2 基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の見学・模倣・実施の実践

グループ 5 世話人氏名： 田中悟郎

GW 司会者：平 大地 記録者：萩野裕樹 発表者：片町奈緒

学修目標

作業療法参加型実習について、その指導形態、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の習得のための、見学-模倣-実施の指導ポイントおよびコーチング・ティーチングを活用した効果的な指導方法について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 説明、目的がわかりやすく理解が深まる。
2. 一緒に行くことで学生に安心感がある。
3. 精神・発達・認知症の分野で行う際には応用が必要。

グループワークで議論された内容

＜「作業療法参加型実習」を実際に行っていく上で考えられるメリットと課題＞

メリット

- ・段階分けしているのわかりやすい。
- ・手本を見ることができ、実施することがわかり、学生には安心感がある。
- ・説明を事前に行うことで患者に安心感がある。
- ・学生に説明を丁寧に教えることができ、自分も勉強になる。
- ・学校で習ったことと臨床で学んだことのすり合わせの機会になる。
- ・指導者は教えることで自分のできていない所がわかる。
- ・リスクの整理ができる。

課題

- ・繰り返し行うことにもなり、利用者の負担がある。
- ・教える側に技術・知識が必要。
- ・学生の緊張感をどう緩和させるか課題がある。
- ・患者のリハ時間を使うので患者に不利益を与える。
- ・個別で学生に説明する時間が取りにくい。
- ・精神科では見学・模倣・実践を行うのはどうしたらよいか。

感想

- ・精神科で応用する場合、工夫する必要がある。
- ・実習していた時のことを思いだし、このような実習形式であれば安心すると思う。
- ・発達分野で応用することが難しいと感じた。
- ・認知症患者に対して伝えることが難しい。
- ・動画の指導者の態度を見習いたい。

報告書：演習 2 基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の見学・模倣・実施の実践

グループ 6

世話人氏名：東 登志夫

GW 司会者：岩本泰幸

記録者：川口未世

発表者：草野嵩一朗

学修目標

作業療法参加型実習について、その指導形態、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の習得のための、見学-模倣-実施の指導ポイントおよびコーチング・ティーチングを活用した効果的な指導方法について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 指導内容を言語化し何度も反復することで、学生の理解やイメージが深まる。
2. 学生の課題点、理解度を明確化できる。
3. 対象者によっては失敗体験とならないよう、指導者の管理が重要。

グループワークで議論された内容

<「作業療法参加型実習」を実際に行っていく上で考えられるメリットと課題>

メリット

- ・何度も言語化しながら伝えるのでイメージしやすい。
- ・何度も反復することで、どこで悩んでいるのか明確化しやすい。
- ・実施する前に説明を受けることで学生の緊張がゆるむ
- ・指導者の考えが学生に伝わり、そこから学生の考えもまとまりやすい。
- ・指導者へ質問することも怖いことがある。指導者側から尋ねられることで学生が意見を言いやすい。
- ・その都度、学生がうまく出来なかったところを確認でき、改善点をその場で伝えられる。
- ・まず良かった点を学生に伝えることが、伝え方としてよいと思う。
- ・方法や目的を反復して伝えることで、学生のみならず患者さんへも練習内容・目的を繰り返し伝達できる。

課題

- ・先に指導者から問うことで学生の自主性がどうなのか。
- ・小児分野において 失敗を嫌がる子供さんも多い。失敗を次に生かせることが少ない。失敗体験をさせないように指導者が入るタイミングを見逃さないように注意しないといけない。
- ・リハビリ時間内に学生指導に割く時間を多くとりすぎないように配慮が必要。

感想

作業療法参加型実習についてのメリットと課題を把握することが出来た。指導者、学生ともにメリットが多いと認識した一方で、対象となる患者の特性によってはその進め方に配慮が必要と学ぶことができた。今後の実習指導にぜひ活かしていきたい。

報告書：演習 2 基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の見学・模倣・実施の実践

グループ 7 世話人氏名：徳永瑛子

GW 司会者：宮崎浩平 記録者：林田浩司 発表者：松本康宏

学修目標

作業療法参加型実習について、その指導形態、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の習得のための、見学-模倣-実施の指導ポイントおよびコーチング・ティーチングを活用した効果的な指導方法について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 学生と指導者のコミュニケーション（達成度の共有、良い点を伝えられる等）
2. 学生が理解しやすく、自信に繋がりやすい
3. 指導者側にも相応の知識・技術が求められる

グループワークで議論された内容

<「作業療法参加型実習」を実際に行っていく上で考えられるメリットと課題>

メリット

- ・評価や訓練の目的を学生に説明してもらうことで理解しやすい
- ・学生の理解がどこまで進んでいるか細かく確認できる
- ・学生とバイザーの達成度のすり合わせができる
- ・説明をしながらなので学生が理解しやすい
- ・学生の自信に繋がりやすい
- ・学生の理解度が把握しやすい
- ・見守りの中でリスク管理、利用者の安全の徹底が行いやすい
- ・学生の良い点を伝えられる
- ・事前の説明や実際に評価しながらのタイムリーな説明にて学生が分かりやすい
- ・繰り返し確認することができ（見学の時・模倣の時・実施の時）、より学生の知識を深めることができる
- ・学生がどこまで達成できているのか抽象的ではなく、具体的に提示できる
- ・学生の能力（現状）に対して、指導者側と学生本人の乖離を最小限にできる
- ・セラピストの考えが伝わりやすい

課題

- ・実際の臨床場面でここまで説明できるのか（時間的問題・スキルの問題など）
- ・評価や治療内容によっては利用者への負担が大きい
- ・対象者に同じ評価やアプローチを何度も行うため負担がかかることの理解が求められる
- ・模倣する前に指導者等での一連の練習が必要なのではないかな
- ・業務中に行うため、他の業務に影響が出る可能性あり
- ・指導側にも相当の知識や技術が求められる

感想

学生からするととても丁寧で、やる気になると思う。説明し何故行うのか目的も明確であるため、臨床的にも今後につながると思う。

学生と指導者とで到達度など共有できるため、学生指導者間の乖離がなく、よりタイムリーな指導ができるのではないかなと思う。

報告書：演習 2 基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の見学・模倣・実施の実践

グループ 8 世話人氏名： 田中 剛

GW 司会者：橋口 裕樹

記録者：松下 奈津希

発表者：松下 奈津希

学修目標

作業療法参加型実習について、その指導形態、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の習得のための、見学-模倣-実施の指導ポイントおよびコーチング・ティーチングを活用した効果的な指導方法について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 学生の理解度が高まる
2. 時間配分が難しい
3. 分野によって指導が難しい点がある

グループワークで議論された内容

＜「作業療法参加型実習」を実際に行っていく上で考えられるメリットと課題＞

メリット

- ・従来よりも複数の患者を見ることができ視野が広がる
- ・指導者が指導しやすく学生の理解度が深まる
- ・指導者が事前に実践してくれるため学生としては理解度が高くなる
- ・指導がいきわたっているため学生が理解しやすい
- ・学生の理解度をチェックできる
- ・指導者側の知識も深まる
- ・学生の習熟度が上がる

課題

- ・学生にかかる時間が増え、患者の治療時間が短縮してしまう
- ・期間内に実施できる評価の種類が少なくなってしまう
- ・指導者側の指導の仕方や技術が間違っていると学生に正しく指導できない
- ・指導者側の指導技術の主熟度が重要になる
- ・学生のレベルに合わせた指導の見極めが必要
- ・学生の理解が得られない場合にどう進めていくか難しい
- ・身障分野では個別に指導できるが精神分野では集団となるため患者 1 人 1 人の指導が難しい
- ・その場でフィードバックが難しい場面がある

感想

丁寧な指導が可能になるため学生の理解度が深まるとともに、指導者側の知識も深まるが、学生にかかる時間が増えてしまうため、患者への治療時間が短くなってしまうことが懸念されると感じた。また分野によっては個別の指導が難しい場面もあり、適宜対応が必要になると思われる。

報告書：演習 2 基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の見学・模倣・実施の実践

グループ 9 世話人氏名：井戸 佳子

GW 司会者： 本田敏也

記録者：森内慎也

発表者：平本陽一

学修目標

作業療法参加型実習について、その指導形態、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の習得のための、見学-模倣-実施の指導ポイントおよびコーチング・ティーチングを活用した効果的な指導方法について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 学生の理解
2. 臨床業務と指導時間の線引き
3. 患者の負担

グループワークで議論された内容

＜「作業療法参加型実習」を実際に行っていく上で考えられるメリットと課題＞

メリット

- ・学生がより知識を深めることができる
- ・学生の理解が深まり易い
- ・フィードバックを通して振り返りがし易い
- ・スタッフの一員として働くという意識ができ、やりがいを感じやすい
- ・明確な目的をもって実習へ取り組むことができる
- ・全体の動きを多視覚から見ることができる
- ・学生の理解度が分かり易いので学生がやる気になりやすい
- ・反復することで学生の理解に繋がる

課題

- ・多くの事を求める事ができにくい
- ・一つ一つに時間がかかる
- ・指導時間が長くなると臨床業務への負担がかかる（患者に関わる時間が短くなるのでは）
- ・指導者の力量によって学生の理解に差がでてくる
- ・担当する指導者によって疾患の偏りがでてくる
- ・精神科領域では見学・模倣・実施の線引きが難しい
- ・患者対応の難しさがある

感想

CCS になって臨床での指導がより丁寧にできる側面、時間がかかるという意見が多くあった。どれぐらい時間をさいて指導できるか、臨床との線引きが難しく、指導者の担当する対象者で疾患の偏りが出てくる事がどこの施設でもあり、今後の課題となる。

報告書：演習 2 基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の見学・模倣・実施の実践

グループ 10 世話人氏名：丹羽 敦

GW 司会者： 齋藤将司

記録者： 林田万由

発表者：三岳直也

学修目標

作業療法参加型実習について、その指導形態、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の習得のための、見学-模倣-実施の指導ポイントおよびコーチング・ティーチングを活用した効果的な指導方法について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 指導しやすくわかりやすい
2. 受け身になりやすい
- 3.

グループワークで議論された内容

＜「作業療法参加型実習」を実際に行っていく上で考えられるメリットと課題＞
メリット

何度もポイントの確認を行うことで学生はより理解できる
その場で学生に指導できるのでわからなかったところがすぐに理解できる
アウトプット、実践ができ学生も患者さんも理解しやすい
患者さんの安心につながる
教える側も教わる側もわかりやすい
学生の出来ているところ出来ていないところが確認しやすい
褒められることで安心、自信につながる
患者さんにも訓練の意味がわかりやすい

課題

自分で考えることが減るのではないか
学生の受け身の傾向が強くなる
時間が長くなるので患者様の負担になるのではないか（事前に患者様との信頼関係を気づいておく必要がある）

感想

患者様、学生、指導者ともにわかりやすくていいのではないかという意見が多かった。
動画での説明がとても分かりやすかった。

演習 3

ハラスメント防止

報告書：演習3 ハラスメント防止

グループ 1 世話人氏名：荒木一博

GW 司会者： 山田麻和 記録者： 朝永耕平 発表者： 宮腰昇

学修目標

作業療法臨床実習における臨床実習施設と養成校の連携した指導体制、対象者の権利保障・安全性の確保のためのリスク管理、個人情報保護について理解する、また学生の適正な指導のためのハラスメント防止について、指導場面を想定し、その対応を学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. 自分の話しをきっかけに使う
2. 話しかけられやすい空気感を作る
3. 学生とのラポールを形成することでハラスメントを起こしにくくする

グループワークで議論された内容

<臨床実習におけるハラスメント防止対策案>

- ・学生とのラポールが指導の深さを決めるのではないかと思う
 - ・対象者に関して話す回数を増やしていく（学生の考えを広げていく）
 - ・学生から意見を引き出すというよりは**自分の話からする**。聞き手になり過ぎずに距離を縮めていく。
 - ・実習生プロフィールも踏まえ、**自分の話をする**。距離を自然に縮めていく。
 - ・学生が補助的にしたことに対してお礼を伝える。学生に**話しやすい雰囲気を作る**。
- 話せるようになってきた段階で世間話をする。学生が**話しかけやすい関係を目指す**。
- ・実習の最終日に食事するのは、学生の捉え方によってはハラスメントになりうる。
 - ・実習の振り返りを含めた食事会をしてもらったことは自分にとってはありがたかった。
 - ・ノミネーションともいうが、お酒が弱いなど食事会が苦手な学生もいることを理解する。
 - ・コロナ渦の中で画面越しのコミュニケーションの方が和んだという経験がある。

感想

学生とのラポールをとることでハラスメントから遠ざけられるのではないか。そのためには、コミュニケーションを増やす必要があり、バイザー側から会話の糸口を見つけ、話しやすい雰囲気を作ることが大切だと感じた。

指導者は指導するだけの立場ではない。お礼を伝えたり、自分の話からするなど学生の話を引き出しやすい空間となるように環境を整えていくことが大切だと感じた。

常日頃から、学生とのラポール形成は重要だと感じた。学生の気持ち、実習への緊張が緩和できるよう、細かな配慮が大切だと思いました。お礼や、一言何かを伝えることで実習中に一瞬でも日常に戻れることが出来れば、学生の緊張も緩和し、本人らしさが出てくるのではと思う。そのためには指導者以外のスタッフの協力も必要だと思った。

報告書：演習3 ハラスメント防止

グループ 2 世話人氏名： 中村 和也

GW 司会者： 勝元 笑利奈 記録者： 岩本 悠 発表者： 山口 数友樹

学修目標

作業療法臨床実習における臨床実習施設と養成校の連携した指導体制、対象者の権利保障・安全性の確保のためのリスク管理、個人情報保護について理解する、また学生の適正な指導のためのハラスメント防止について、指導場面を想定し、その対応を学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. 学生自身が自分の身を守れるようになっていくことが重要
2. ハラスメントに対してのスタッフの周知が必要
3. 実習前に見学や実習に入る予定の患者様を検討しておく

グループワークで議論された内容

<臨床実習におけるハラスメント防止対策案>

◎患者様から学生へのセクハラに対して

- ・予測が出来そうな患者様（抑制が出来ない患者様）を学生に担当させない
- ・実習前に距離感や自身の守り方を学生へ伝えておく

◎患者様から学生への質問（プライベートな話など）

- ・患者様と二人きりにしない

◎性差別に対して

- ・性差を感じたのはどうしてか分析する
- ・それは、ハラスメントであるという認識を深める

◎飲み会などの誘いに対して

・出欠に関して、学生の不利にならないように考慮する為に、断っても良いことを学生へ伝える

- ・誘わない

◎スタッフから学生への質問

- ・学生の反応を見ながら話す
- ・指導者側が考慮する必要がある

感想

様々なハラスメントがあり、分野でも対応策が違っていると感じた。しかし、スタッフ間の周知や学生の身を守る方法は共有し、十分なハラスメント対策を行う必要があると考える。

報告書：演習3 ハラスメント防止

グループ 3 世話人氏名：牧野 航

GW 司会者：志木内寛子

記録者：長谷川朔子

発表者：出口夏代子

学修目標

作業療法臨床実習における臨床実習施設と養成校の連携した指導体制、対象者の権利保障・安全性の確保のためのリスク管理、個人情報保護について理解する、また学生の適正な指導のためのハラスメント防止について、指導場面を想定し、その対応を学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. 過度なことはしない
2. ハラスメントについての勉強、共有
- 3.

グループワークで議論された内容

<臨床実習におけるハラスメント防止対策案>

- ・歓迎会など過度に誘わない
- ・プライベートのことは不用意に聞かない
- ・無理に家に送らない

- ・研修会に参加し、ハラスメント、指導などについて勉強する(施設内で共有)
- ・職場内での勉強会、事例検討会を実施して、共通認識をもてるようにする
- ・学生の特性、学生への対応について、複数人(職場全体)で共有しておく

- ・養成校と、学生の特性などについて共有しておく(連携をとる)。
- ・指導者会議などに参加し、ハラスメントについて学んで共有する。

感想

- ・どのハラスメントにおいても明確なラインがない為、難しさを改めて感じた。
- ・学生、指導者どちらも守る為には、1人で抱えず、スタッフ間で共有し、対応する必要があると感じた。
- ・ハラスメントについては、施設全体で勉強し、取り組む必要性があると感じた。

報告書：演習3 ハラスメント防止

グループ4

世話人氏名：鎌田秀一

GW 司会者：石本昭仁

記録者：松本奈津美

発表者：桑原小牧

学修目標

作業療法臨床実習における臨床実習施設と養成校の連携した指導体制、対象者の権利保障・安全性の確保のためのリスク管理、個人情報保護について理解する、また学生の適正な指導のためのハラスメント防止について、指導場面を想定し、その対応を学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. フィードバックの方法
2. 手技の伝達や練習の方法
- 3.

グループワークで議論された内容

<臨床実習におけるハラスメント防止対策案>

- 1) 時間設定（業務時間内）し夜遅くならないようにする
- 2) ハンドリングの際は、同性や複数人で行うようにする
 - ・身体に触れる手技の指導に関しては、同性で行うといった工夫を行う。
- 3) 指導者が社会性を磨く
 - ・精神的な圧力をかけるような指導はしない。
- 4) 学生の主体性を導く
 - ・質問しやすい雰囲気を作るよう心がける。
- 5) 相談窓口を作っておく
 - ・バイザー以外で相談できるスタッフを病棟に配置する。
- 6) 学校側とバイザー側の連携

感想

- ・何かする前に相手が嫌がる言動、行動ではないか、考えて行動にうつす事が重要。
- ・学生の立場上、断りにくい事も多いため、必要に応じて相談窓口を活用するなど、学生の逃げ場をきちんと確保しておく必要がある。
- ・指導者側の強制にならないように、学生の主体性を引き出す指導方法を身に付ける必要がある。

報告書：演習3 ハラスメント防止

グループ 5 世話人氏名： 田中悟郎
GW 司会者：甲木 俊 記録者：串間慎吾 発表者：定村千穂

学修目標

作業療法臨床実習における臨床実習施設と養成校の連携した指導体制、対象者の権利保障・安全性の確保のためのリスク管理、個人情報保護について理解する、また学生の適正な指導のためのハラスメント防止について、指導場面を想定し、その対応を学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. 複数の指導者で学生を見る
2. 定期的にハラスメントの意識をつけておく
- 3.

グループワークで議論された内容

<臨床実習におけるハラスメント防止対策案>

- ・定期的にハラスメントの知識を深める
- ・実習指導者と話し合いながら複数で関わる
- ・アンケートなどを活用して自分の言動を振り返る
- ・他者へ相談する
- ・学生が身近に相談できる人がいる

感想

複数で関わることは良いと感じた。
学生にプライベートを聴き過ぎないようにしたい。
身なりには注意する。

報告書：演習3 ハラスメント防止

グループ 6 世話人氏名：森内 剛史

GW 司会者： 堤 逸人

記録者：畑田 美恵

発表者：馬場 徳子

学修目標

作業療法臨床実習における臨床実習施設と養成校の連携した指導体制、対象者の権利保障・安全性の確保のためのリスク管理、個人情報保護について理解する、また学生の適正な指導のためのハラスメント防止について、指導場面を想定し、その対応を学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. 学生側の相談窓口を設ける。
2. 学生側がハラスメントと感じている様子があったら対応をかえる。
3. スタッフ全員がお互いハラスメントになりそうな場面があったら声かけをしあう。

グループワークで議論された内容

<臨床実習におけるハラスメント防止対策案>

- ・出勤時間に関して、出勤時間を決めて事前に伝える。
- ・見学、模倣、実施の流れを利用すると一方的な指導にならずに済むのではないかな。
- ・学生はハラスメントだと伝えられないので、第三者になる人を作り、話しやすい雰囲気を作る。
- ・指導方法の徹底をすることで注意の仕方も変わる。
- ・指導者として実習を乗り切ったという達成感を伝えたい気持ち。他の学生と一緒に食事会をするなどの工夫。
- ・学校側からこれは『やめて欲しい』という事を事前に伝えてもらう。
- ・学生に対しても一社会人として、距離を置きながら接することで強要などはおきないのではないかなと思う。
- ・バイザーや直接的な指導者ではない学生が話しやすいスタッフを作り、嫌なこと等相談を出来る環境を整える。
- ・実習の到達目標は学生のレベルに合わせ、高すぎる目標を設定しない。
- ・実習の初期段階で学生とハラスメントの認識を一致させる時間を作る。

感想

指導者として、どんなことがハラスメントと取られるのかという線引きが難しく、どのような伝え方、接し方であればハラスメントにならないのかを苦慮する場面が多いと感じた。また、熱心な指導やお疲れ様会など良かれと思って行っていること（善意）との境界線も難しい。そのため、学生との十分なコミュニケーションや、学生が相談しやすい環境を整えることが大事であると感じた。

報告書：演習3 ハラスメント防止

グループ 7 世話人氏名：徳永瑛子

GW 司会者：森園亜由美

記録者：今池大樹

発表者：野口歩愛

学修目標

作業療法臨床実習における臨床実習施設と養成校の連携した指導体制、対象者の権利保障・安全性の確保のためのリスク管理、個人情報保護について理解する、また学生の適正な指導のためのハラスメント防止について、指導場面を想定し、その対応を学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. プライベート
2. ハラスメントへの意識
3. スタッフの教育

グループワークで議論された内容

<臨床実習におけるハラスメント防止対策案>

- ・指導者へハラスメントについての説明
- ・個人の意識改革（セクハラに対する意識）
全体で学習する機会があった方がよいのではないかと。
- ・プライベートの事は聞かない
- ・どのような言動がハラスメントに当てはまるか共有する
- ・プライベートに必要以上に関与しない
- ・実習に関わるスタッフ以外への、セクハラに対する意識づけする
- ・他のスタッフとも話し合う
- ・実習生と同性のセラピストが担当する
- ・歓迎会などを減らす
- ・学生の指導者に対する態度が悪い場合は、間に学校に入ってもらおう
- ・患者さんからのセクハラ発言にはセラピストが介入する

感想

実習に関わるスタッフの意識付けが実習期間に関わらず常に必要。
プライベートに関する会話や関わりをする場合は、他のスタッフが客観的に見て必要に応じて注意していくことも必要。

報告書：演習3 ハラスメント防止

グループ 8 世話人氏名： 田中 剛

GW 司会者：松下 奈津希 記録者：吉田 永七子 発表者：吉田 永七子

学修目標

作業療法臨床実習における臨床実習施設と養成校の連携した指導体制、対象者の権利保障・安全性の確保のためのリスク管理、個人情報保護について理解する、また学生の適正な指導のためのハラスメント防止について、指導場面を想定し、その対応を学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. 指導者側の理解が重要
2. 線引きが難しいため、学生に対して養成校から教育してほしい
3. 加害者側の自覚と周囲から注意するなどのサポート

グループワークで議論された内容

<臨床実習におけるハラスメント防止対策案>

- ・ 個々人のハラスメントに対する知識を深めるための研修が必要
- ・ ハラスメントと感じたら声を掛け合う
- ・ 病院内での勉強会
- ・ 指導者が学生に対して注意しながら接していく必要がある
- ・ 指導者は必ず知識として理解しておく
- ・ セクシュアルハラスメントにおいては指導者と学生は同性にする方がよい
- ・ 実習中に学生がハラスメントと感じた場合は養成校の先生に報告してもらい、養成校の先生と指導者で情報の共有化を図る
- ・ 加害者は自覚していないこともあると思うので、自分がされて嫌なことはしない。
- ・ 自分の判断基準で判断しない
- ・ パワハラについては線引きしやすいがセクシュアルハラスメントについては線引きが難しいため、善意との線引きを教育として学校側でお願いしたい
- ・ 周りがサポートしていく
- ・ 学校側から相談窓口を作ってもらう環境づくり

感想

指導者が十分ハラスメントについて理解し、学生に十分注意しながら接していく必要がある。また、相談窓口を学校側に作ってもらい、学校側から指導者に指導して頂き、情報の共有化を図ることが一番改善出来ると感じた。

報告書：演習3 ハラスメント防止

グループ 9 世話人氏名： 井戸 佳子

GW 司会者： 荒木 知沙 記録者： 本田 敏也 発表者： 秀嶋 沙季

学修目標

作業療法臨床実習における臨床実習施設と養成校の連携した指導体制、対象者の権利保障・安全性の確保のためのリスク管理、個人情報保護について理解する、また学生の適正な指導のためのハラスメント防止について、指導場面を想定し、その対応を学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. 指導者以外の相談相手（学生と年齢が近いセラピストなど）
2. スタッフ間の連携（学生の対応にスタッフに共通認識がある）
3. 学校との連携（悪天候時の休みの判断など）

グループワークで議論された内容

<臨床実習におけるハラスメント防止対策案>

- ・相談できる相手が必要。
年齢が近いスタッフと指導者とは違う関係性を築けられれば、問題があったときに相談しやすい。
- ・学校側へ確認し、方針を決定する。相談ができる人が必要。指導者が言わない。
指導者が上司に指摘することも必要。
- ・スタッフ全体で「報連相」が必要。学生に対する対応についての共通認識が必要。
- ・時間があるときにフィードバックを行う。
時間がなければフィードバックを短時間で行う。または、行わない。
- ・飲み会をしない。
- ・言い方を考える。

感想

学生との関わり方が変わってきているので、スタッフ側はそれを理解し変わらなければならない部分もあると感じる。他の班から意見が出ていたが、ハラスメント講座などを受講することも必要だと思う。スタッフと学生間の良好な関係が築け、お互いに良い実習にすることができればと思う。

報告書：演習3 ハラスメント防止

グループ 10 世話人氏名： 丹羽 敦

GW 司会者： 林田万由

記録者：三岳直也

発表者：田崎美智

学修目標

作業療法臨床実習における臨床実習施設と養成校の連携した指導体制、対象者の権利保障・安全性の確保のためのリスク管理、個人情報保護について理解する、また学生の適正な指導のためのハラスメント防止について、指導場面を想定し、その対応を学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. 指導内容の可視化 チームで実習生を見る
2. 実習生との距離感を考える
- 3.

グループワークで議論された内容

<臨床実習におけるハラスメント防止対策案>

- ・必要以上に学生を職場に残さない
- ・実習終了後、連絡が必要な場合は学校と相談する
- ・学生指導が行き過ぎないように、指導者に対して統括者（上司）が指導する
- ・飲み会ではなくランチ形式にする
- ・学生が相談しやすい環境をつくる 指導内容を可視化できるようにする

感想

良かれと思って行ったことがハラスメントになることを改めて知る機会になった。慣れない実習に頑張っている学生に対して、指導が行き過ぎて将来をつぶすような言葉を言うてしまう指導者がいたということがショックだった。

演習 4

臨床実習における学生評価

報告書：演習 4 臨床実習における学生評価

グループ 1 世話人氏名： 桑原由喜

GW 司会者：吉崎一樹

記録者：岩永裕人

発表者： 犬塚祥子

学修目標

作業療法臨床実習における教育評価の意義、実習過程での診断的・形成的・総括的評価の内容、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の評価に関する実習指導者と教員の役割、また種々の評価手法、特に OSCE 活用の特長を理解する。さらに問題学生への対応方法について議論し学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. 社会人のルールに重きを置いている
2. 自分で出来る問題解決方法（ネットではない情報の調べ方）を備えてくる
3. バイザーと養成校の先生との連携の充足
（大事になる前に相談しやすい関係性の構築）

グループワークで議論された内容

<学生を評価する際に重きを置いている>

- ・社会人としてのルール（人間性、挨拶、時間を守るか）
- ・分からないときに聞けるか
- ・積極性
- ・提出物の期限を守るか、指導されたことを覚えていけるか
- ・約束を守るか
- ・自分の思いを相手に言葉で表現できる（伝えられる）こと

<臨床実習に行くまでに学生に備えてほしいこと（態度面、知識面、技術面）>

- ・実習させていただいているという思い
- ・知識としてのマナー
- ・分からないことがあった時の課題解決方法（情報の調べ方）
- ・OT としての責任
- ・そもそも社会人としてのマナーなどが大事にされることを知っていて欲しい

<実習で問題が生じた学生と、その対応>

- ・指導者によって態度を変える学生がいた（メインバイザーに対してつんとする）
→養成校の先生が訪問、本人のストレスを軽減
- ・休む学生
→養成校の先生が心理面にケア
- ・バイザーに報告しないまま、評価を進める
→学生に状況確認（どこがいけなかったのか）、報告、連絡、相談の指導
養成校の先生に来てもらい、対応を一緒に考える
- ・空気を読めない（みんなが掃除していてもしないなど）学生
→行って欲しいことを明確に伝えるようにした（〇〇は一緒にして等）
- ・AD/HD の学生（急にどこか行く、患者のところに行く）
→前の実習地のバイザーに対処策を聞く、学生と一緒にできることを考えていく
いいところを認める
- ・やる気がない学生（実習中に OT になる気がないと話す、事前情報なし）
→養成校の先生と面談、実習は最後まで継続したが、その後退学
養成校からの事前情報の提供、目標レベルを変えて指導する等

感想

知識よりも、困ったことがあった時に解決する方法を知っておくことが大事だと思います。

評価では社会性を見ているという意見の方が多く、基本的な見方は一緒だと安心しました。

養成校の先生方との顔が見える、相談しやすい関係性作りが今後進んでくると、バイザーの不安軽減にも繋がると感じます。本研修会がそのきっかけになるように感じました。

技術面以上に、基本的な社会人としてのマナーに重きを置くことが重要だと改めて再確認できました。養成校との連携をより深く取ることで、事前に指導者側も学生を知ることができます。それが学生を円滑に指導するにあたり必要なことだと感じました。

報告書：演習 4 臨床実習における学生評価

グループ 2 世話人氏名：荒木一博

GW 司会者：吉村 梓

記録者：葛島 志保

発表者：岩本 悠

学修目標

作業療法臨床実習における教育評価の意義、実習過程での診断的・形成的・総括的評価の内容、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の評価に関する実習指導者と教員の役割、また種々の評価手法、特に OSCE 活用の特長を理解する。さらに問題学生への対応方法について議論し学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. 養成校との連絡を取り合い、双方で共有する
2. 学生を評価するにあたり、指導者も評価視点を定めた上で評価を行い、FB する
3. 学生の問題が生じた場合、原因を探ったり、負荷を減らしたり、また学校と共有しながら対応する。

<学生を評価する際に重きを置いている点>

- ・学生が実習した時に思っている事や本人の考えをしっかりと聞くこと。
- ・学生の意見を聞く、本人にも実習の評価をしてもらう。
→活動に対して具体的に自分で振り返ってもらい、その後 FB をしていく。
- ・学力より学生がどう分析して、どう考えているかをしっかりと聞く。
- ・実習に対しての取り組む姿勢をどうしていきたいか聞くこと。
- ・学生が苦手なところや伸ばしたい所をどう考えているかを伸ばしていきたい。
- ・学生の意欲がどのくらいあるのか、またそれをどう引き出すことができるのか。
- ・学生の変化について
(前半ではできなかったことができるようになった際に肯定的な FB をしていく)

<臨床実習に行くまでに学生に備えてほしいこと（態度面、知識面、技術面）>

- ・基本的な挨拶、礼節などの社会人としてのマナーは身に付けておいてほしい。
- ・分野や実習先の特性に応じた基本的な知識。
- ・机上で学んだ事と臨床での違いや、分からない事をきちんと聞く力。
- ・基本的な評価の方法を把握しておいてもらいたい（基本的な事が分かっていると応用できないため）。
- ・実際の患者に評価を行った際の反応やどのような部分を臨床で見ているか。

<実習で問題が生じた学生と、その対応>

- ・その日の実習内容の確認を行おうとしたら自身の体調に関する不調を訴える、体調管理ができていない。
→養成校に報告した。体調不良に関しては医療機関の紹介をした。
- ・実習には不適切なメイクをしてきた。挨拶もできなかった。
→養成校に連絡をして相談。指導者側としては実習生の長所を話し合ったが自ら実習中止を申し出た。
- ・生真面目な学生。レクの体験などをしてもらった。成長はみられていたが反省点が多くネガティブな意見が多く聞かれた。
→正のフィードバックを増やしたが、そのみでは解決しなかったため、必ず正フィードバックと今後の課題も話した。
- ・OT になることをやめたいなど、モチベーションの低下がみられる。
→養成校へ相談
- ・社会人経験者あり指導者より年上の学生。指導者に対して年齢のことを指摘（自分より年下ですよね）。

→年齢を考慮し、年齢が指導に影響しない指導者とした。

・提出物が提出されないケース

→空き時間にその日に行くことでわからないことなどを確認する、記録時間などを確保し、その日のうちに記載できるようにする、明日行うことや提出物を確認し、時間に猶予を与える、優先順位をつける、週末などゆっくりと考えられる時間を有効活用する、最終的には指導者も一緒に考えていく。

・身体的不調を訴える学生、ストレスが要因で休みがちとなる学生

→（2/3は実習に参加する必要がある）課題の量を減らす、見学の際に座って過ごすなど負担を減らす、学生のプロフィールに正直に身体的な不調を記載していただけると配慮できる。

感想

実習指導者は、指導者（教育者）として求められる役割があり、その役割を果たせるよう、学生自身のことや能力、課題などを評価を通して明確にしていくことの必要性を感じました。また、養成校と密に連絡を取り合うことの重要性を改めて実感しました。

報告書：演習 4 臨床実習における学生評価

グループ 3 世話人氏名： 牧野 航

GW 司会者： 川口 徹 記録者： 菅崎 流理 発表者： 出口 夏代子

学修目標

作業療法臨床実習における教育評価の意義、実習過程での診断的・形成的・総括的評価の内容、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の評価に関する実習指導者と教員の役割、また種々の評価手法、特に OSCE 活用の特長を理解する。さらに問題学生への対応方法について議論し学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. 社会性・人間性
2. 実習を通しての成長度
- 3.

グループワークで議論された内容

<学生を評価する際に重きを置いている点>

- ・コミュニケーションスキル、あいさつ、社会人としてのマナー等
- ・学校が提示する到達目標を基準として、どこまで学生が達成できるか見ていく
- ・社会性・人間性（一緒に働きたいと思うかどうか）
- ・実習を通しての変化、成長度、出来ているところ
- ・自己理解（自分がどこまでできたが、目標達成度）
- ・報告・相談ができているか
- ・態度面（意欲など）

<臨床実習に行くまでに学生に備えてほしいこと（態度面、知識面、技術面）>

- ・社会人としてのマナー（コミュニケーション、言葉使い、あいさつ、身だしなみ）
- ・生活を維持出来る（食事や睡眠、持病の管理など）、生活リズムを整えておく
- ・「報連相」をしっかりと実施できるか
- ・実習への意欲はあるか
- ・病気に関する知識（実習先の主疾患の把握）はあるか、調べる材料を準備しているか
- ・評価ツールを事前に確認しているか

<実習で問題が生じた学生と、その対応>

- ・学生が実習途中で帰ってしまい、そのまま実習終了になった
- ・見学中、訪問リハに参加した学生が途中で寝てしまった
- ・患者さんと学生間で売り買いのやりとりがあった
- ・忘れものが多い学生がいた
- ・ツイッターに患者さんを特定できるような内容をのせていた
- ・実習開始 1 時間前に着いて、多職種に迷惑をかけた
- ・実習初日から職員との距離感がうまくとれない
- ・実習 2 日目から来なくなった、実は学生はうつ病で学校側も把握していたが、実習先には連絡もなく、状況把握出来ていなかったためバイザーにとっても傷つき体験となった
- ・初日から休憩中に爆睡していたので注意し、養成校に報告した
- ・評価の進行具合がかなり遅い学生がいた
- ・フロッピーディスクが壊れた、プリンター壊れたと言う学生もいた
- ・コロナ感染防止のため、二週間前に事前に現地入りしているのに、彼女を連れてきていて福岡へ帰っている人々と接触して実習中止となった

感想

実習地と養成校間での情報共有、連絡が重要。学生を総合的に評価・指導しながら、将来OTとして働いてくれるようサポートする必要があると感じた。

報告書：演習4 臨床実習における学生評価

グループ 4 世話人氏名： 鎌田秀一

GW 司会者： 松本奈津美 記録者： 古賀慎治 発表者： 馬場大地

学修目標

作業療法臨床実習における教育評価の意義、実習過程での診断的・形成的・総括的評価の内容、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の評価に関する実習指導者と教員の役割、また種々の評価手法、特に OSCE 活用の特長を理解する。さらに問題学生への対応方法について議論し学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. 社会人としてのマナーを守る
2. 興味のある分野や学びたいことの抽出
3. 主体性を引き出す実習

グループワークで議論された内容

<学生を評価する際に重きを置いている点>

<知識>

- ・基本的な評価方法が把握できているか
- ・リスク管理がしっかり行えるか

<社会性>

- ・患者やスタッフなどコミュニケーションが取れているか
- ・社会性やリスク管理は大前提。やる気などを見ている。
- ・社会性に重きを置いている。興味のある分野の確認を行っている。
- ・社会人としてのマナー（遅刻をしない、期限を守る）等。
- ・挨拶や人との関わり方

<興味関心>

- ・学生の興味の確認をして、優先的に興味の高い患者さんをみてもらっている。長所を活かして実習を行ってもらっている。
- ・発達分野の実習は興味がある学生が多い。学びたいことが学べているか。主体性を引き出す。
- ・学生が学びたいところを大切にしたい。

<臨床実習に行くまでに学生に備えてほしいこと（態度面、知識面、技術面）>

- ・原疾患の基礎的な知識・評価（ROM・MMT等）社会人としてのルール（挨拶など）、
- ・患者さんと接する上での基本的な態度（欠伸をしない等最低限のこと）。言葉遣い。
- ・健康の自己管理、生活の管理。身だしなみ。
- ・学ぶ姿勢。実習施設の特性は知っていてほしい。
- ・作成書類の基本的な書き方はおさえてきてほしい。

<実習で問題が生じた学生と、その対応>

- ・トイレを我慢して膀胱炎になってしまった。養成校から連絡が来て発覚し、すぐに帰宅してもらった。
- ・具合が悪い事を言えず倒れてしまった。処置を見て倒れてしまった。→苦手なことはきちんと伝えるように指導を行った。
- ・元々実習に対し自信があったが、入所されている方とのコミュニケーションに悩んで自傷行為をしてしまった。その後実習中断となった。→オリエンテーションで施設の説明をしっかりと行う。どのような実習にしていくか学生と十分話し合う。実習前に重症心身障害に関して事前学習してもらおう。

- ・実習中に母親が入院した。→多くのことは求めず、丁寧に対応し課題の量を調整した。
- ・服装に問題がある実習生がいた。→バイザーから指導したが、改善難しく、養成校の先生からの指導となった。

感想

- ・学生の主体性を伸ばしていった方が実習は楽しくなる。実習が円滑に進むように、実習前に社会人としてのルールをしっかり学んできてほしい。
- ・事前学習として、基本的な態度と評価の取得は大前提。学生の知識や技術に関して、事前に養成校としっかり話しておく必要がある。その上で学生のレベルに合わせて、実習の目標などを決めていくことが大切。
- ・指導者側も手本となるように、身だしなみや言葉遣いに気を付ける必要がある。
- ・事前プロフィールで実習生だけではなく、養成校からのコメント（学校での指導で難しかった事、実習中に気を付けてほしいこと等）もあると良い。

報告書：演習4 臨床実習における学生評価

グループ 5

世話人氏名： 田中悟郎

GW 司会者：5-3 原口卓也

記録者：5-4 平 大地

発表者：5-5 萩野裕樹

学修目標

作業療法臨床実習における教育評価の意義、実習過程での診断的・形成的・総括的評価の内容、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の評価に関する実習指導者と教員の役割、また種々の評価手法、特に OSCE 活用の特長を理解する。さらに問題学生への対応方法について議論し学ぶ。

発表の要点 (キーワード)

1. 基本的な社会性や学ぶ意欲、実習を通しての変化の評価が重要
2. コミュニケーション、身なりや器具の使用法資料など事前準備は備えてほしい
3. 色々な問題がある学生、不安を抱えている学生もおり指導・助言をしていく

グループワークで議論された内容

<学生を評価する際に重きを置いている点>

挨拶など基本的なコミュニケーションがとれるか 学生がどのような人かの把握
多職種や患者との関わり方 長所・短所の把握 社会性の把握
学ぶ意欲が感じられるかどうか 実習を通して変化したことを伝える

<臨床実習に行くまでに学生に備えてほしいこと(態度面、知識面、技術面)>

基本的な礼節、コミュニケーション 服装・身なり
事前に注意・指導を受けたこと 資料の準備
振り返りをできる準備 検査機器の使用法
移乗動作の方法 健常者に ROM など最低限できる技術
コミュニケーションスキルを色々経験してほしい

<実習で問題が生じた学生と、その対応>

- ・体調を崩して実習中止となり学校の方で対応してもらった
- ・休みの連絡があったにも関わらず外出していた学生(実習中にパチンコに行っていた)
- ・訪問先で寝てしまった(疲れがたまっていた)
- ・なぜ掃除をしなければいけないのかと不満を言う学生に対して、社会性・礼節を学ぶ場でもあるということを指導した
- ・レポートの修正が1週間ほど変わらず、その後辞めたいといい辞めた学生もいた
- ・評価の量に驚愕した学生もいた
- ・挨拶ができない学生については、学生の特徴など学校からバイザーへ事前に説明が必要
- ・学生同士で話が盛り上がっていたので注意した
- ・緊張が強い学生が患者に触れていいか不安を抱えていたので、大丈夫と不安を取り除く声かけをおこなった
- ・学生と一緒にやってみることで不安を和らげる
- ・メモを取る行為について、精神科の患者の前では取らないように指導した

感想

色々な情報交換ができて勉強になった。事前に分かっていると指導者側も安心できる。問題が起こった時に誰に相談するかわかれば良いと思った。

報告書：演習4 臨床実習における学生評価

グループ 6 世話人氏名： 森内 剛史

GW 司会者： 草野 嵩一朗

記録者： 下田莉華子

発表者： 岩本泰幸

学修目標

作業療法臨床実習における教育評価の意義、実習過程での診断的・形成的・総括的評価の内容、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の評価に関する実習指導者と教員の役割、また種々の評価手法、特に OSCE 活用の特長を理解する。さらに問題学生への対応方法について議論し学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. 社会人としてのマナー、報告、連絡、相談をしっかり行う
2. 実習前に実習地側から知っておくポイントを提示して、そのことについて事前学習をしてもらう
3. 養成校の先生と連絡を密にとり、問題点を学生、指導者、学校側で共有し対応を考える。

グループワークで議論された内容

<学生を評価する際に重きを置いている点>

- ・患者様との距離感・コミュニケーション
- ・基本的な時間や期限を守るなど
- ・社会人としての接し方
- ・成長の伸び幅
- ・実習に臨む態度（感謝の気持ち、努力）
- ・評価、疾患に対しての知識に対しての関わり方（学んだ事臨床に活かしているか）
- ・実習前後での変化
- ・指導を受けた後の、変化（探求心）

<臨床実習に行くまでに学生に備えてほしいこと（態度面、知識面、技術面）>

- ・リスク管理
- ・評価の練習
- ・あらかじめ実習分野の知識⇒実習で結びつけがし易くなる
- ・実習前にここは知っておくポイントを提示しておく（事前学習をってもらう、実習地側が提示する）
- ・社会人としての態度（あいさつ、ハウレンソウ）
- ・実習地の施設の基準を把握しておく

<実習で問題が生じた学生と、その対応>

- ・見学中に寝る、遅刻など

⇒なぜそのようなになったのか生活状況を確認し、対策を一緒にたてる

- ・ウィキペディアの内容をそのままレポートにのせていた

⇒学校の先生を交えて話し合いをする

- ・途中でOTになりたくないと感じた学生（体調不良が重なる）

⇒指導方法を変更する。考えさせるよりは教える方法で指導する

⇒養成校の先生を交えて話しあいを行う

- ・提出物の忘れ⇒可能な範囲で指摘を行う

- ・学生の話し方が気になるというクレーム⇒本人と話を行う、気づきを促す

- ・先輩の発表・情報をコピーペーストする、情報が違うレポートを出してしまう。

⇒本人と話しあいを行う

感想

学生の評価においては社会的・常識的なことに加えて、実習の各段階での成長・変化にも着目して評価する必要があると感じた。学生の問題点においては学生と建設的な問題解決の方法を考える必要があり、必要に応じて学校側とのコミュニケーションも必要であると感じた。

報告書：演習4 臨床実習における学生評価

グループ7 世話人氏名：徳永瑛子

GW 司会者：大谷幸己

記録者：宮崎浩平

発表者： 林田浩司

学修目標

作業療法臨床実習における教育評価の意義、実習過程での診断的・形成的・総括的評価の内容、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の評価に関する実習指導者と教員の役割、また種々の評価手法、特に OSCE 活用の特長を理解する。さらに問題学生への対応方法について議論し学ぶ。

発表の要点 (キーワード)

1. モチベーション、社会性
2. 基本的知識と情報
3. 養成校との連携

グループワークで議論された内容

<学生を評価する際に重きを置いている点>

開始時に設定した目標の達成度

やる気 (モチベーション)

積極性 挨拶 元気があるかどうか 学生ではあるが医療従事者である自覚
人の向き合う仕事なので、どれくらい利用者の方の事を知ろうとしているか
主体性、当事者意識

体験したことの言語化

コミュニケーション

<臨床実習に行くまでに学生に備えてほしいこと (態度面、知識面、技術面) >

話を素直に聞く姿勢

健康管理

清潔感のある身だしなみ

生活リズムを整える

・知識面

実習先の分野や対象疾患に対する基本的知識の見直し

病院、施設についての基本情報

対象となる疾患の最低限の評価バッテリーの種類把握

コミュニケーションスキルの勉強

教科書で学ぶ基本的な病態

・技術面

評価法の見直し、練習

健常者での評価の練習

コミュニケーション能力

<実習で問題が生じた学生と、その対応>

- ・バンドと実習を掛け持ち→養成校へ連絡、対応してもらい実習は最後まで実施
- ・消極的な学生で、OT になりたいか分からない。自信がない学生。→他のスタッフともディスカッションして一緒に対応した。
- ・指導中に寝る学生→養成校と相談して、受診、診断に至った。
- ・緊張しすぎて実習内容を思い出せない→場面毎に沿ったヒントを出しながら想起できるような関わりを行った。

感想

何かあったら養成校と連携し、対応していくということが必要である。また、問題があるなしに関わらず養成校との連携は今後深めることが大切と思う。

どこからが問題なのか不明確な部分もあるため、一人の判断に委ねるのではなく、他のスタッフとの共有など事前の準備も大切かと思う。

報告書：演習4 臨床実習における学生評価

グループ 8 世話人氏名： 田中 剛

GW 司会者： 吉田 永七子

記録者：力久 祥子

発表者：力久 祥子

学修目標

作業療法臨床実習における教育評価の意義、実習過程での診断的・形成的・総括的評価の内容、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の評価に関する実習指導者と教員の役割、また種々の評価手法、特に OSCE 活用の特長を理解する。さらに問題学生への対応方法について議論し学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. 基本的態度 自己評価
2. 基礎知識の復習
3. 身体面の考慮

グループワークで議論された内容

<学生を評価する際に重きを置いている点>

☑基本的態度：身だしなみ 言葉遣い コミュニケーション能力 報告連絡相談 意欲

☑形成的評価：知識の理解度 自己評価

☑総合的評価：他のスタッフ※①からの評価

※①：他職種、理学療法士、看護師、SW、PSW（精神保健福祉士）、Dr、etc...

<臨床実習に行くまでに学生に備えてほしいこと（態度面、知識面、技術面）>

態度面：物品等の事前準備 基本的態度 言葉遣い 身だしなみ 健康

知識面・技術面：学生自身が学びたいこと（目標設定） 基礎知識、評価技術の復習

養成校側より情報：OSCE では外部講師（他病院）を招いて行っている。実際の臨床現場の意見等を取り入れている。

<実習で問題が生じた学生と、その対応>

☑課題の提出

対策：午前午後にはデイリーを記入する時間を設けた。 課題を1つ減らした。

☑持病による体調不良

対策：早めに帰宅させる、休憩をとるなどの対応

☑持病による体調不良

対策：診察、実習中静養

☑担当患者さんとの関係性

対策：養成校へ報告、指導。 学生の生活背景に考慮した対応

☑レポートを紛失してしまった。

対策：無くさないように注意

☑持病（抑うつ 内服中）による出席日数

対策：養成校に報告 その後、出席日数をクリアできれば良いとの判断

☑持病（貧血）

対策：椅子に座ってカンファレンスに参加していただく。

☑持病 精神疾患、発達障害の学生さんも多くなっている印象がある。

対策：養成校より実習施設に事前に伝達する。

感想

臨床現場において、指導者のみで解決できる問題は少ないため何らかの問題が生じた場合は、職場内で相談し、養成校と密に連携をとる必要があると改めて感じました。

報告書：演習4 臨床実習における学生評価

グループ 9 世話人氏名： 井戸 佳子

GW 司会者： 平本陽一 記録者： 植木百合子 発表者： 本田敏也

学修目標

作業療法臨床実習における教育評価の意義、実習過程での診断的・形成的・総括的評価の内容、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の評価に関する実習指導者と教員の役割、また種々の評価手法、特に OSCE 活用の特長を理解する。さらに問題学生への対応方法について議論し学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. 実習を通しての学生の変化
2. 社会性の重要性
3. 養成校との連携

グループワークで議論された内容

<学生を評価する際に重きを置いている点>

- ・負の体験をさせないようにしている
- ・自信をなくさせないようにすること
- ・学生は皆スタート地点が違うのでどのくらい改善したか（コミュニケーションや自主性等）、変化したことに重きを置いている
- ・知識も大事だが、学生がどの場面をみてどう感じたか、OTに対する感じ方
- ・評価をする際に、第三者からの目線も必要ではないか。（一つの目線でなく）
- ・どうすれば臨床に出たときに生かせるか、プラスになる事を評価するように
- ・学生がどこまで理解できているか学校に報告する

<臨床実習に行くまでに学生に備えてほしいこと（態度面、知識面、技術面）>

- 態度面：社会性 不快にさせないような態度 時間や約束を守る 健康管理 組織のルールを守る コミュニケーション
- 知識面：そこまで知識については求めている 学校で習った最低限の知識 大まかな疾患、どういう症状があるのか
- 技術面：人の体に触れることに慣れておく コミュニケーション

<実習で問題が生じた学生と、その対応>

- ・昼休みに寝転がりスマホ（ゲーム）を触っている→TPOに応じて対応するよう指導
 - ・指導者との距離感が近すぎる→上司と相談し解決
 - ・コミュニケーションが全く取れない学生→学校と相談する
 - ・コミュニケーションが取りにくい学生→コミュニケーションの取りやすい患者さんを担当させる
 - ・人の話の時に足を組む、欠伸をする学生→上司に相談する
 - ・社会性に欠けるような学生（お菓子を勝手に食べる）→養成校と話し合う
- 学生の客観的な評価があったらよい
→学生と指導者の話しあい

感想

- ・実習において社会性は重要である
- ・問題のある学生には養成校と連携をとり対応していく必要がある

報告書：演習 4 臨床実習における学生評価

グループ 10

世話人氏名：丹羽 敦

GW 司会者：三岳直也

記録者：田崎美智

発表者：中島輝

学修目標

作業療法臨床実習における教育評価の意義、実習過程での診断的・形成的・総括的評価の内容、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の評価に関する実習指導者と教員の役割、また種々の評価手法、特に OSCE 活用の特長を理解する。さらに問題学生への対応方法について議論し学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. 学生の成長過程
2. 養成校と病院・施設との連絡体制・連携・対応の仕方
- 3.

グループワークで議論された内容

<学生を評価する際に重きを置いている点>

- ・オリエンテーション時にどんなセラピスト像をもっているか、実習の力を伸ばしたいか
- ・どんな OT になりたいか
- ・「報連相」ができるか
- ・コミュニケーション力はどうか
- ・実習開始時に学生の実習の目標を一緒に立て、それがどれくらい達成できたか。
- ・どういう目的で実習にのぞんでいるのか、なにが知りたいのか。
- ・精神科の OT に対してどんなイメージや認識をもっているのか。そこから学生の実習目標をどこにおくかを検討する。（目標が高かったり、低かったり様々であることも把握した状態で。）
- ・患者様にかかわってもらい、患者様のどこに興味を持ったか、興味を持てたのか、そこから作業療法アプローチの展開ができるか。
- ・成長過程をみる。

<臨床実習に行くまでに学生に備えてほしいこと（態度面、知識面、技術面）>

- ・態度面：最低限度のラインで実習において支障がない程度のこと（他の患者様・バイザーへの接し方、挨拶、社会のルール）
- ・知識面：精神科、身体障害領域で扱う教科書的な知識と病態
- ・技術面：どんな活動を使うのか、どんな風にかかわるのか
- ・病気になった人の気持ちや生きづらさを考えることができるか（イメージネーション）。
- ・行く病院・施設について調べておいてほしい。
- ・Word、Excel の仕方がスムーズにできる。
- ・教科書・資料がない学生が多かったため、最低限の教科書・資料は準備してほしい。

<実習で問題が生じた学生と、その対応>

- ・寝坊、課題をしていないなど基本的なルールがなされていない実習生：バイザー、統括、学校の先生と何度も話し合いの場を設けた。
- ・課題をしてこない：学校の先生に話す。午前・午後にまとめの時間を設けて課題をすませる。
- ・課題をしない、締め切りを守らない学生が増えた印象：学生に応じた対応を行う。キャパシティーに応じた対応。課題を減らす。

- ・精神科の既往をもった学生がストレスなどかかえてしまい、休む、課題をしない、守らない：Dr に相談、学校側に相談したが、結果、中断。
- ・ネガティブな学生：本人のいいところを伝える。見方を変える。表現を変える。
- ・OT に興味がない学生（コミュニケーション、知識などには問題なし）：実習はスムーズに終わったが、興味が湧くことはなかった。

感想

- ・問題を抱えた学生は、病気の既往を持っている学生もいるため、それを事前に知ったほうが良いか、知らないほうが良いか、判断が難しい。
- ・興味がない学生には動機づけやモチベーションをあげることが難しい。

演習 5

多職種連携

報告書：演習5 職業倫理および連携論

グループ 1 世話人氏名：田中 剛

GW 司会者：江崎 祐介

記録者：山田 麻和

発表者：朝永 耕平

学修目標

作業療法臨床実習を円滑に実施するために、倫理観にもとづいた多職種によるチーム連携について理解する。また卒後教育との関連について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 他職種との話し合い（カンファレンス・引き継ぎ）場面に参加してもらう
2. 院内の同職種への引き継ぎを経験してもらう
3. 他職種の中で作業療法士がどの役割を担うか意識してもらう

グループワークで議論された内容

<多職種連携を実習場面で学生に伝える方法>

- ・実働現場の中でドクターや他職種とリスクなどの**確認を行う場面を共有**している
- ・PT が先に介入している場合が多いので、**事前情報共有**を行っている
- ・院内での引き継ぎの際に、学生さんから**引き継ぎを経験**してもらう
- ・レクリエーション委員会など、部署以外が関わるイベントの**話し合いと一緒に参加し**、他職種の視点を聞いてもらい、折り合いの付け方や話し合いの流れを経験してもらう
- ・幼稚園など他施設と一緒にいき、**他職種の方と一緒に目標を定めていく過程を共有**してもらう
- ・リハビリ以外の時間に看護師さんに依頼している部分など、連携していることを知ってもらうために、**軒下の話し合いに参加**してもらう
- ・一緒について情報収集する、**他職種との協業の中で作業療法士がどの役割を担うかを意識**してもらう、そのためにも他職種の役割を知ってもらえるよう、その職種に少しついてもらう場合もある
- ・見てもらう、体感してもらうことが大切。自分のやっていることも見てもらう
- ・引継ぎ場面を見てもらう

（問題提起）

- ・バイザーと共に行動することが多いが、患者について、他職種との関わりを見学してもらうこともよい経験にならないだろうか？
→出来るのか。看護はバイザーなしでリハビリ場面に見学したりしているので出来るかもしれない。急性期ではリスクが高すぎることもあるが、学生の状態やラポール次第では、可能性はある。病棟との連携が上手くいっていない場合は、限られた範囲でしか見せられない場合も考えられる。

感想

- 現状、参加・体験してもらおう場を設定できているようでした。今後、看護の実習形態も参考に、リスク管理を行った上で患者視点での他職種の動きや関係性について学ぶ機会があってもよいと感じました。
- 多職種連携するなかで、PT、ST が介入する場面への介入は行いやすいが、病棟生活を見ている看護職の同席が行いにくいのは共通としてあった。患者に同席する形で他職種を知っていくといくなど、学生が学びやすい環境を整えること必要だと感じました。
- 他職種の専門性を正しく理解できていないこともあるので、今一度多職種の専門性を理解していこうと思いました。

報告書：演習5 職業倫理および連携論

グループ 2 世話人氏名：村木敏子

GW 司会者：葛島 志保

記録者：岩本 悠

発表者：勝元 笑利奈

学修目標

作業療法臨床実習を円滑に実施するために、倫理観にもとづいた多職種によるチーム連携について理解する。また卒後教育との関連について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 実際の現場を経験する
2. 電話や連絡を密に取る
3. 情報収集の予定やアポ取りを見学、体験する

グループワークで議論された内容

<多職種連携を実習場面で学生に伝える方法>

◎訪問リハの連携◎

- ・他職種と連携が難しい。自発的に連携を図ることが大切。
- ・同じ敷地内に様々なリハの形態があれば連携しやすいが、他事業所であるならば相談事業として連携を図っていく必要がある。
- ・合同ミーティングなどの場で連携を図ることが多い。
- ・電話連絡で予定を組んで情報収集に行く。→学生も一緒に行く
- ・定期的なカンファレンスに学生も入ることで他職種がどのように関わっているかを経験出来る。

◎院内の連携◎

- ・朝のカンファレンスや連絡の場に学生にも入ってもらい、指導者が後からフィードバックをする。
- ・申し送りの際に質問や気になることを言える場を作る。
- ・ほかの職種に聞きたいことを事前に指導者に確認してから聞きに行った。
- ・実際のカンファレンスやミーティングの場を見もらう。
- ・様々な職種とチームでのカンファレンスを行っている。POS の合同チームの発足により学生にも経験できる場を提供できる。

◎学生が質問しづらい時…◎

- ・他職種の特性を伝えた上で質問を一緒に考える。
- ・患者様のゴールに向けてどのような支援を行っていくか、どのような職種の関わりが必要かを学生と一緒に考える。
- ・学生が気になっていることを指導者が引き出す。

感想

他職種との連携は、経験を積んでいくことが大切である。他職種の特性を知り、どのような関わりを行っているかを学生にも伝えてチームで患者様を支えていることを知ってもらい経験を学生に提供していきたい。

報告書：演習5 職業倫理および連携論

グループ 3 世話人氏名： 丹羽 敦

GW 司会者： 川口幹 記録者： 菅崎流理 発表者： 川口徹

学修目標

作業療法臨床実習を円滑に実施するために、倫理観にもとづいた多職種によるチーム連携について理解する。また卒後教育との関連について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 実際に多職種連携を行っているところをみてもらう
2. カンファレンスなどに実際に入ってもらおう
3. 多職種連携を行う際の前後の説明も重要

グループワークで議論された内容

<多職種連携を実習場面で学生に伝える方法>

- ・カンファやミーティングに入ってもらおう、多職種で意見が違うところもみてもらう
- ・多職種 (PT や NS) の治療・業務を見学させてもらう
- ・看護師さんをできるだけ味方につけるように、良好な関係を築けるコツを教える
- ・日ごろのコミュニケーションを見てもらう
- ・実際に多職種との情報収集を行ってもらおう、項目は事前に指導者も確認する
- ・訪問にも見学は行ってもらおう
- ・家族や送迎スタッフにも情報収集しているところを見てもらう、事前に目的など説明しておく
- ・勉強会で多職種連携を教える
- ・多職種が行っている勉強会にもは行ってもらおう、その職種の目線、専門性をみることもできる

感想

多職種連携においては実際に見学・体験してもらおう。また事前にしっかり多職種連携の目的、重要性、OT の役割など説明し、終了後のフィードバックもしっかりと行う。他職種の目線や専門性、その職種の強みなど体験・実感してもらいたい。

報告書：演習5 職業倫理および連携論

グループ 4 世話人氏名： 中村 義博

GW 司会者： 桑原小牧

記録者： 馬場大地

発表者：古賀慎治

学修目標

作業療法臨床実習を円滑に実施するために、倫理観にもとづいた多職種によるチーム連携について理解する。また卒後教育との関連について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. カンファレンスでの情報共有
2. 専門性の理解
- 3.

グループワークで議論された内容

<多職種連携を実習場面で学生に伝える方法>

- 1) 多職種の仕事内容を把握してカンファレンスを通しそれぞれの役割を決める過程を理解してもらう
- 2) Dr、Ns、MSW それぞれの役割を勉強してもらって実習に参加してもらう
- 3) 多職種共同での研修会へ参加し、専門性の違いを理解してもらう
- 4) 電子カルテ上の内容を共有する
- 5) 日々の業務内で行う口頭での情報交換に参加してもらう
- 6) PT、OT、ST のリハを介入してそれぞれの専門性を理解してもらう
- 8) 急性期、回復期、生活期でのカンファレンスの違いを理解してもらう
- 9) 退院前訪問を通して福祉業者等との多職種連携を感じてもらう
- 10) 車椅子の作成を通して業者とのやりとりを通して物品の選定、導入の流れを理解してもらう

感想

皆、カンファレンスや臨床場面の見学など、実際にそれぞれの職種がどのように動き、やりとりをしているのかを見てもらうことが重要と感じていた。

学生さんに多職種との関りをきちんと示す意味でも、日々の自分自身の関わり方も見直していきたいと思った。

報告書：演習5 職業倫理および連携論

グループ 5 世話人氏名：大坪 建

GW 司会者：片町奈緒

記録者：甲木 俊

発表者：串間慎吾

学修目標

作業療法臨床実習を円滑に実施するために、倫理観にもとづいた多職種によるチーム連携について理解する。また卒後教育との関連について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 朝の申し送りやカンファレンスに参加し、各職種の専門性を意識してもらう
2. リハ訓練内容やその目的・意図などを病棟に伝達する場面を見せる
3. 指導者自身が多職種連携について、より意識しておくことが大事

グループワークで議論された内容

<多職種連携を実習場面で学生に伝える方法>

- ・朝の申し送りやカンファレンスに参加
- ・他職種への情報収集のなかで専門性を意識
- ・対象者に長く関わる職種から、他職種の視点を尊重しつつ情報収集
- ・自然に情報交換できる環境にあるので、そこを見せよう
- ・関連施設への見学を通して多職種の動きを知る
- ・装具着脱方法等を申し送る場面を見学
- ・その日の体調の伝達をし、リスクを共有する また、ワーカーとの連携 その見学
- ・介護職へのデモンストレーションによる伝達場面を見学

(課題)

- ・多職種連携は自然なことであり、あまり意識して学生に伝えていなかった
- ・お互い歩み寄る、尊重し合うことが大事
- ・リハへの依存度が高くなることがあるので、役割を明確にする

感想

- ・自分が普段やっていることをみせ、ポイントを伝えたい。
- ・まず自分ができていないといけないと思う。
- ・病棟に行ってスタッフ同士の会話を聞いてもらうことも有意義だと思う。
- ・多職種と仲良くしているところをみせる。雰囲気づくりは大事。

報告書：演習5 職業倫理および連携論

グループ 6 世話人氏名：鎌田秀一

GW 司会者：川口末世

記録者：堤逸人

発表者：畑田美恵

学修目標

作業療法臨床実習を円滑に実施するために、倫理観にもとづいた多職種によるチーム連携について理解する。また卒後教育との関連について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. カンファレンス、ラウンドに学生さんも参加する。
2. 各職種の講習会に学生さんも参加する。
3. 他職種に学生さんが情報収集を行う。

グループワークで議論された内容

<多職種連携を実習場面で学生に伝える方法>

- ・カンファレンスを通してどの職種からどのような情報が得られるかを学んでもらう。
- ・Dr, 各職種の講習会に学生さんに参加してもらう。
- ・デイケアで様々な職種の方と一緒にデイケアの場をすごしてもらう。
- ・学生さんが多職種に質問する前に、各職種の業務等について説明する。
- ・カンファレンスに参加してもらいOTに求められているものを感じてもらう。
- ・看護師と比較し患者さんと長く関わるOTが、患者さんの求めている事などを把握しやすいので、看護側への情報提供をする場面とその過程を学生さんに見てもらう。
- ・各部署のラウンドに学生さんも参加させてもらい、学生さんにそれぞれの職種の視点、業務を体験してもらう。
- ・患者さんを担当するチームの方と他職種カンファレンスを開催し学生さんにも参加してもらう。
- ・NSTへ参加してもらい、身体機能等の情報提供場面を観てもらう。

感想

他職種の連携を学んでいただくには各職種の説明を情報収集前にする必要がある。加えて、カンファレンスやラウンドへの参加を通し各職種の視点を学んでもらうことが必要だと感じた。また、各職種から作業療法士に何が求められているのかも感じてもらいたい。

報告書：演習5 職業倫理および連携論

グループ 7 世話人氏名：牧山美穂

GW 司会者：松本康宏

記録者：森園亜由美

発表者：今池大樹

学修目標

作業療法臨床実習を円滑に実施するために、倫理観にもとづいた多職種によるチーム連携について理解する。また卒後教育との関連について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. カンファへの事前準備
2. 実際場面の見学
3. 職域の理解

グループワークで議論された内容

<多職種連携を実習場面で学生に伝える方法>

- ・様々なカンファレンスと一緒に参加する
- ・カンファへの出席前にどのような進行をするか学生に伝えておく
- ・実際に流れをみてもらったり伝えたりしている
- ・情報収集に関して、多職種からの情報収集の場面を実際にみてもらい、また職種ごとの強みを知る
- ・患者、利用者の申し送りをする場合、実際にその場面をみてもらい
- ・情報共有
- ・利用者の健康状態の変化（NS や Dr への報告）
- ・院内での情報共有媒体を一緒に活用していく

感想

基本的には、実際の場面を見学する機会を多くとり、指導者以外の場面の見学の機会も設けるようにしている。

他職種の職域の理解を深めて、役割を理解した上での協働を意識してもらうことが必要だと思う。

今後、OT として地域への関わりなどが増えてくるとさらに他職種との関わりが増えるため、協働の意識はさらに必要だと感じる。

報告書：演習5 職業倫理および連携論

グループ 8 世話人氏名：久毛 希

GW 司会者：力久 祥子

記録者：岩永 祐一

発表者：岩永 祐一

学修目標

作業療法臨床実習を円滑に実施するために、倫理観にもとづいた多職種によるチーム連携について理解する。また卒後教育との関連について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 話し合いの場への参加
2. 職域の理解
3. 生活イメージから情報収集の必要性を知る

グループワークで議論された内容

<多職種連携を実習場面で学生に伝える方法>

- ・申し送り・カンファレンス・担当者会議に同行および見学
必要に応じて発言してもらう（参加前に目的・職種を確認、終了後フィードバック）
- ・訪問などで病院スタッフ以外の方（ケアマネ・家族）との関わり
- ・カルテで統一事項を確認する場面
- ・ADL 介助方法などNs・介護士へこちらから声かけして連携する場面
- ・訪問リハでは地域ケア会議など積極的に参加させる
- ・病棟のリハカンファレンスや回診にてDr・他学生含めて情報交換を行う
- ・学生は入院時支援が中心になるが、病前生活を含めた評価は情報収集の方法含め指導者が助言する
- ・他職種の役割の指導は、可能であれば他職種の見学および直接情報収集する

<ファシリテーターから>

- ・学生は生活のイメージがつきにくいのでトップダウンでの評価（ゴール設定からなど）を指導して他職種連携の必要性も理解してほしい

感想

身体障害・訪問リハ・精神障害など様々な病院および施設での他職種連携の指導方法を知り、バリエーションが増えた。また学生に対し他職種からの情報の内容だけでなく、職域の理解および患者さんの生活イメージから指導することが肝要であることがわかった。

報告書：演習5 職業倫理および連携論

グループ 9 世話人氏名：荒木一博

GW 司会者：秀嶋 沙季 記録者：平本陽一

発表者：本田敏也

学修目標

作業療法臨床実習を円滑に実施するために、倫理観にもとづいた多職種によるチーム連携について理解する。また卒後教育との関連について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 作業療法の役割、他職種の役割を理解
2. 様々なカンファレンスの場を共有する
3. 日々の業務の中での何気ないやり取りを観察する場面を多く作る

グループワークで議論された内容

<多職種連携を実習場面で学生に伝える方法>

- ・カンファレンスに参加する（申し送り、リハカンファレンス、退院前カンファなど）。
- ・他職種と連絡をとって、情報収集の場を作る。
- ・退院前訪問の場に参加（色々な職種が参加する：地域スタッフとの連携）
- ・申し送り、サマリーなどを利用しながら、患者様の情報を共有する。
- ・他職種への情報収集状態や報告（話し合いの場を作っていく）。
- ・リハのスタッフが普段はやらない業務でもスタッフが居ないため、介護保険申請などを行う事があるが、その際にどのように関わっているか見てもらう。
- ・事前に質問の内容を確認した上で連携を図っていく。
- ・他職種から指導してもらうような関りの機会として、1週間程度、看護助手や看護師に付き添って実習を送るケースもあり。
- ・地域スタッフ（ケアマネ・ヘルパー）との連携は、退院前にケアマネを招いて、動作の確認などを行ってもらう。
- ・急性期病院などでは連携がなかなか難しい事もある。
- ・日々の業務の中での他職種との何気ない会話などを見せるだけでも学生にとっては有効になってくるのではないかな。
- ・学生同士（OT・PT・ST間など）の会話などでも視点の違いを感じる事が出来るのではないかな。

感想

- ・OTの役割を明確にする事も大切であるが、他職種の業務内容をしっかりと理解していく事も凄く大切であると感じた。指導方法には、説明や見学など色々あると思われるが、他職種に付き添って実習を送るケースもあり、今後生かしていける事も多くあった。
- ・形式的なカンファレンスや場を設定しての情報収集、日々の業務の中での関わりなど、色々な場面を見てもらう事で、少しずつ学生の理解も深める事に繋がっていくのではないかと感じる事が出来た。

報告書：演習5 職業倫理および連携論

グループ 10 世話人氏名： 井戸 佳子

GW 司会者：田崎美智

記録者： 中島 輝

発表者： 吉原 司

学修目標

作業療法臨床実習を円滑に実施するために、倫理観にもとづいた多職種によるチーム連携について理解する。また卒後教育との関連について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. カンファレンス
2. 事前の説明
3. 日常生活での情報共有の場面に参加

グループワークで議論された内容

<多職種連携を実習場面で学生に伝える方法>

- ・老健で見学。見学の前にリハの役割や各職種の立場の意見を説明した上で見学を実施。
- ・説明が主である。
- ・多職種連携の活動に参加。長期の実習ではカンファレンスに参加。
- ・カンファレンスへの参加。
- ・精神科。退院前のカンファレンスへの参加。作業療法士の視点を説明した上で、どのようなことをカンファレンスで伝えていくのかを説明していく。ちょっとした看護師さんとの相談ややり取りなどにも積極的に見学、参加していただく
- ・スタッフは病棟配属で、他職種がすぐ近くにいるため、会話する場面を見学して頂き、カンファレンスなどに参加してもらう。カンファレンスで話す内容は学生にも伝え、見学のポイントを伝える。
- ・訪問：CM やヘルパーなどが集まる場で対象者の状況をいっしょに確認しサービスなどを考える。
- ・対象者の思いを如何にして吸いあげるかなど、カンファの場で見学して理解してもらう。
- ・他職種の業務内容を知っておくことが重要。

○カンファレンスや ADL 場面での伝え方を見学して頂く。

感想

- ・それぞれの施設での連携の伝え方を知ることが出来た。

演習 6-1
MTDLP によるマネジメント過程
の実践

報告書：演習 6-1 MTDLP によるマネジメント過程の実践

グループ 1

世話人氏名：末武 達雄

GW 司会者：朝永 耕平

記録者：宮腰 昇

発表者：吉崎 一樹

学修目標

MTDLP を活用した作業療法の臨床実践課程を概観し、作業療法参加型臨床実習における MTDLP の活用の仕方を学習し、その特徴を理解する。

発表 の要点 (キーワード)

1. 学生の時から取り入れるとスキルの担保になりそう
2. 学生からみてOTの流れが把握しやすく、内容を整理しやすい、相互理解しやすい
3. 指導者が活用できていない、時間がかかる、指導者の習熟が必要

グループワークで議論された内容

<MTDLP を臨床実習指導に取り入れるメリットと課題>

- ・基礎修了者 7名、未受講 1名

メリット

- ・OTの**流れの把握**が分かりやすい。まとめる、伝えることしやすい。
- ・経過に時間がかかる人に使いやすい。
- ・使いこなせるとわかりやすく、**伝えやすい**。
- ・紙面に残るので共有しやすい。
- ・**順序立てしやすい**。
- ・**学生の時から使用に慣れる**ことで卒業後OTスキルの担保になるのでは。
- ・後輩でもOTも**整理しやすい**
- ・学生と一緒に行うことで課題がみえやすい
- ・ICFの代わりになりそう（両方は時間が足りない）
- ・言語化できるので、**臨床思考が整理しやすい**

課題

- ・まとめることが煩雑、重度の方では合意形成が難しい。
- ・急性期など短期入院の方は使いにくい。
- ・CE自身が**活用していない**と、学生指導で使用しにくい。
- ・**活用した方が少ない**。
- ・小児分野だと自己表現が難しい対象者の場合に目標形成がやや難渋する可能性がある。
→他のツールとの併用を検討する必要がありそう（ADOC など）
- ・理解に**時間がかかる**、用紙が多い、簡略化できればよさそう
- ・用紙多く**時間がかかる**
- ・書き込むことが多い、**CEも普段の業務に加えて記入するのは時間がとりにくい**
- ・CEのスキルが必要

感想

MTDLPを活用することで指導者、学生ともに分かりやすく課題も明確にしやすく今後活用していきたいと思った。記入に時間がかかる、理解に時間がかかる等の課題もあり、自身が経験を積みスキルを向上させる必要性を感じた。

講習を改めて聞いてみて、使いこなせればセラピスト自身も内容整理が行いやすく学生指導にも活用できそうだと思います。まずは、部分的にも患者様に使用しツールとして使用して行けるよう練習していきたいと思います。

報告書：演習 6-1 MTDLP によるマネジメント過程の実践

グループ 2 世話人氏名： 田中 剛

GW 司会者： 山口数友樹

記録者： 葛島志保

発表者： 徳成慧吾

学修目標

MTDLP を活用した作業療法の臨床実践課程を概観し、作業療法参加型臨床実習における MTDLP の活用の仕方を学習し、その特徴を理解する。

発表の要点 (キーワード)

1. 決まった項目があるため流れが理解しやすい
2. 臨床の思考過程と同じであるため理解が得られやすい
3. MTDLP への指導者の理解とそのことを学生へ指導する力

グループワークで議論された内容

<MTDLP を臨床実習指導に取り入れるメリットと課題>

(メリット)

- ・シートの流れに沿って記入するためどこが分からないのか理解しやすい
- ・進行具合が学生、指導者にも分かりやすく、明確化している
- ・目標がはっきりとしているため、焦点化した関わりが行える
- ・一つの道筋を立てやすい、他職種の関わり方が明確となる
- ・一つのツールとして決まったものであるため、指導者によって教えられ方が大きく変化するなどが無いのでは
- ・作成した MTDLP を学生に見てもらい、参考としてもらった

(課題)

- ・聞き取り方が難しい
- ・指導者側が MTDLP をしっかりと理解しておかないと使用しにくい
- ・小児分野などで活用できるか不安
- ・病識や認知機能により理解が得られ難い対象者への使用が難しいのではないか
- ・アセスメント項目シートが身体障害領域の項目が多いのでは。精神疾患に当てはまる項目が少なく記入が行いにくい印象
- ・シートはまとめる項目が多いため、学生指導の中で一つ一つの項目を見ていく上では時間がかかる、記入する量が多い

感想

対象者の意味のある生活行為を理解でき、臨床場面でのトップダウン思考の思考過程を学生へ提示しやすい。他職種との関わり方なども伝えることができ、流れが理解しやすいものであると思います。小児、精神分野での活用や聞き取り方などを指導するにあたり難しいこともある。指導者の理解も必要と思われます。

報告書：演習 6-1 MTDLP によるマネジメント過程の実践

グループ 3 世話人氏名：丹羽 敦

GW 司会者：出口夏代子

記録者：志木内寛子

発表者：川口 幹

学修目標

MTDLP を活用した作業療法の臨床実践課程を概観し、作業療法参加型臨床実習における MTDLP の活用の仕方を学習し、その特徴を理解する。

発表の要点 (キーワード)

1. 作業療法や他職種連携など学生にとって分かり易い
2. 指導者の経験、力量、習熟度により左右される
3. シートが沢山あり作成が大変

グループワークで議論された内容

<MTDLP を臨床実習指導に取り入れるメリットと課題>

目標設定が明確になる

→自宅に戻れる方が少ない領域（社会的入院等）で実施する場合、目標設定が趣味・活動となる対象者と考えると、対象者が少なく適応対象者が限られる。

若手や実習生になぜ趣味・活動を選択したのかを把握することのできるいいツールと感じる。

→MTDLP を臨床で使える人が限られる。

ボリュームのある作業でもあり大変そう。

治療をする中で体系化され具体的であり学生にわかりやすいのではないか。

→経験や把握していないと難しい。

学生の成功体験や意欲に繋がる。

→研修が必要理解をしていないと教えることが困難。

発達分野等で活用するのは難しいのではないか。

感想

実習指導者が MTDLP を把握していることや理解度により、学生に教えたり、臨床で使用するには困難であると感じ、研修に参加したりする事が必要であると感じた。

沢山のシートがあり作成するまでは大変だが、学生や指導者の頭の中を整理しやすいのではないか。どんな方にも、用いられるように、ご本人様やご家族の希望を聞き取り支援につなげ、OT として切磋琢磨していかなければならないと感じた。

報告書：演習 6-1 MTDLP によるマネジメント過程の実践

グループ 4 世話人氏名： 中村 義博

GW 司会者： 馬場大地

記録者：石本昭仁

発表者：古賀慎治

学修目標

MTDLP を活用した作業療法の臨床実践課程を概観し、作業療法参加型臨床実習における MTDLP の活用の仕方を学習し、その特徴を理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 目標設定、計画立案等が可視化され、学生やバイザー、チーム（担当者）がわかりやすい。
2. 学生の進捗状況がわかりやすい。
3. バイザーの理解がしっかりしていないと使えない。練習が必要。

グループワークで議論された内容

<MTDLP を臨床実習指導に取り入れるメリットと課題>

【メリット】

- ・学生は患者の評価、見直し等がわかりやすい。
- ・バイザーも経験になる。
- ・問題点や学生がつまづいた所など把握しやすい。
- ・目標設定しやすい。可視化しやすい。
- ・学生が OT として働くときに働きやすくなる。
- ・学生の進捗状況がわかりやすい。
- ・可視化できる。
- ・活動と参加の分析はしやすい。
- ・関連施設等への申し送りがしやすい。

【デメリット】

- ・ツールが多いため大変。
- ・認知症の方や神経難病の方など目標設定しにくい事例もある。
- ・講義を受けただけではセラピスト側も教えることが難しい。
- ・「誰が何をするか」、多職種を考える（理解する）きっかけにもなる反面、学生には考察することが大変なケースもある。
- ・コミュニケーションが難しい患者には使いにくい可能性がある。
- ・急性期では長く経過を追えない時（転院など）があり難しい。
- ・心身機能面が不十分な学生もいる。
- ・施設ごとでの MTDLP の認識の差

感想

目標設定、計画立案等が可視化され、学生だけでなくバイザー、チーム（担当者）がわかりやすく、コミュニケーションツールとしても使用できるため良いと感じた。一方で指導者も練習が必要であり、使い慣れないといけなと感じた。入職した新人にも導入しやすいと思う。

報告書：演習 6-1 MTDLP によるマネジメント過程の実践

グループ 5

世話人氏名：大坪 建

GW 司会者：5-2 定村千穂

記録者：5-3 原口卓也

発表者：5-4 平 大地

学修目標

MTDLP を活用した作業療法の臨床実践課程を概観し、作業療法参加型臨床実習における MTDLP の活用の仕方を学習し、その特徴を理解する。

発表の要点 (キーワード)

1. 学生の思考過程をまとめることができる
2. 学生も指導者もツールがあることで実習を進めやすい
3. 指導者側に MTDLP の知識が必要

グループワークで議論された内容

<MTDLP を臨床実習指導に取り入れるメリットと課題>

メリット

- ・ トップダウンの考え方を経験する機会になる
- ・ これから臨床で活用していくものなのでトレーニングの機会になる
- ・ まっさらな状態から始めるよりも、ツールがある方が進めやすい
- ・ 学生が実習内容を深めることができる
- ・ 思考過程をまとめるのに良い
- ・ 患者さんの主訴に沿って進めることができる
- ・ 関わりを整理できる

課題

- ・ 指導者側が課題を抽出するのが難しい
- ・ 聞き取りがきちんとできないと方向性がずれていく可能性がある
- ・ 記入する量が多い、時間の確保の問題
- ・ 指導者の MTDLP の知識が必要
- ・ 指導者の事前の準備が必要
- ・ 患者さんによっては活用が難しいことがある (対象者を選ばなければならない)
- ・ 多職種との連携が難しい

感想

指導者と学生と一緒に進めていけるツールなので、主体性を引き出せるものだった。今後、MTDLP を活用していきたい。

報告書：演習 6-1 MTDLP によるマネジメント過程の実践

グループ 6 世話人氏名：鎌田秀一

GW 司会者：畑田美恵 記録者：馬場徳子 発表者：草野嵩一朗

学修目標

MTDLP を活用した作業療法の臨床実践課程を概観し、作業療法参加型臨床実習における MTDLP の活用の仕方を学習し、その特徴を理解する。

発表の要点 (キーワード)

1. 目標達成へのプロセスが可視化され学生の理解が深まる。
2. 行為レベルでトップダウンで見る習慣が学生、セラピスト共に身につく。
3. セラピスト自身が MTDLP を使いこなせている必要がある。

グループワークで議論された内容

<MTDLP を臨床実習指導に取り入れるメリットと課題>

メリット

- ・可視化ができ理解が深まって実際の治療のプロセスがわかりやすい。機能だけではなく生活プロセスも考えられ、本人の状況も OT の仕事の全体がわかりやすい。
- ・細かい身体機能に目がむきやすいが、生活背景や環境因子に意識が向きやすい。目的も伝えやすい。
- ・ボトムアップになりがちな視点が、行為という視点からトップダウンで見る習慣が、学生さんにもセラピストにもできる。
- ・強みや予後予測が苦手な部分だが一緒に考えることができる。
- ・いつ、どこでなどを具体的に記入できるのでプランがうまく行いやすい。
- ・学生さんの意見を引き出しやすい。
- ・本人のしたいことからまず聞くことが、すべきことがはっきりしやすい。
- ・支援者の視点が入っていることで多職種を自然に意識しやすい。

課題

- ・バイザーが MTDLP をしっかり使いこなせないと学生さんの理解が深まらない
- ・日常でやっていることであるが、シートに落とし込むことが難しく、実際にやったことがないセラピストもまだ多い
- ・急性期の患者さんが主なので次の病院への申し送り方も具体的に理解していかないとけない。
- ・研修を受けても実践ができていないと指導が難しい。
- ・生活歴や心情、目標を会話の中で聞き取ることは難しい。ほかのツールも併用していく必要があるかもしれない。
- ・精神科の事例は、まだ多くなく難しい。

感想

結果として、今まで学生さんに考えさせたいと思っていることが可視化された状態で網羅されているため、スタートのラインを揃えやすく、セラピストにとっても思考過程の習熟に役立つためセラピストの実践が必要であると感じました。

報告書：演習 6-1 MTDLP によるマネジメント過程の実践

グループ 7

世話人氏名：牧山美穂

GW 司会者：野口歩愛

記録者：大谷幸己

発表者：宮崎浩平

学修目標

MTDLP を活用した作業療法の臨床実践課程を概観し、作業療法参加型臨床実習における MTDLP の活用の仕方を学習し、その特徴を理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 患者の全体像を把握しやすい
2. 指導者側、学生ともに MTDLP への理解を深める必要あり
3. 対象者の選定（コミュニケーションが取りやすいなど）

グループワークで議論された内容

<MTDLP を臨床実習指導に取り入れるメリットと課題>

[メリット]

学生の達成度、残された課題が可視化される
生活場面への意識が行いやすい
評価のもれがなく、どこまで評価が進んでいるかわかりやすい
対象者への関心や理解を深めることができる
対象者の情報を整理しやすい
次期の実習での課題が形として残る
作業療法の流れが分かる
活動、参加を意識しやすい
問題点だけでなく良い点をみる視点もつく
協働の意識が高まる
指導者も学生も一緒になって考えていくので整理しやすい
対象者の全体像が把握しやすい
課題の達成度が確認しやすい

[デメリット]

指導者側の理解や技術が問われる
学内での理解が進んでいないと、使用法の指導に時間を割く
指導者の理解度の高さが求められる
対象者の選定
時間的な問題
指導者も MTDLP について理解し実践できるようになる必要がある
実施が困難な対象者もいることがある
施設によっては実施が難しい施設もあるのではないか

感想

対象者に関して、対象者、学生、指導者が全体像や目標などを把握しやすく、達成度を確認することが出来る点がよいと思った。一方で MTDLP を利用するために学生だけでなく指導者も理解を含め実践出来るようになることが大切だと思った。またコミュニケーションが取りやすいなど患者の選定も十分考慮することが大切だと思った。

報告書：演習 6-1 MTDLP によるマネジメント過程の実践

グループ 8

世話人氏名：久毛 希

GW 司会者：岩永 祐一

記録者：大久保英梨子

発表者：大久保英梨子

学修目標

MTDLP を活用した作業療法の臨床実践課程を概観し、作業療法参加型臨床実習における MTDLP の活用の仕方を学習し、その特徴を理解する。

発表の要点 (キーワード)

1. 目標を共有できるツールになる。
2. 指導者、学生、多職種も含めて理解、整理しやすい。
3. 指導者側の理解や習熟度が必要。

グループワークで議論された内容

<MTDLP を臨床実習指導に取り入れるメリットと課題>

○メリット：

- ・学生、他職種にもわかりやすい (学生がどの段階で関わっているか)。
- ・活動参加やプログラム設定が学生にとってやりやすいと思う。患者さんの生活歴など聞き取りやすい。
- ・実際に OT がどういうことを考えているか、思考過程の理解につながる。個人因子、環境因子などのバックグラウンドがわかりやすい。工程分析しやすいことが学生にとって良い経験になると思う。
- ・患者さんを詳しく理解できる。興味や将来的なことまで聞き取りできるため、先を見据えた目標がたてやすい。他職種との連携など流れがわかりやすい。
- ・目標を共有できるツール。思いを引き出せると信頼関係や気付きにつながる。
- ・合意目標ができる。
- ・頭の中を整理しやすい。

○課題：

- ・シートが細かいこともあり、学生への課題が多くなるか？逆に負担にならないか？
- ・指導者側の習熟度で指導が変わってくる。担当病棟などによっては導入しやすい対象者がいない場合、導入が難しいこともある。
- ・シート作成に時間がかかりそう。導入するにあたってスピード感があるため、追いつかない部分もありそう。
- ・理解が難しい学生にとっては指導する側の知識、力量も必要。
- ・認知症や進行性の疾患の方など、聞き取りが難しい場合どうしたらよいか？学生も悩むのではないか。場合によっては、指導者寄りの指導になるかも。
- ・指導者側の MTDLP への習熟度が課題。

感想

シートに沿って整理、分析していくことで相互に目標を共有していくことができると思います。指導する際にも指導者の思考過程など伝えやすいものになると思いますが、指導者側の理解や習熟度が必要となることやシートの量の多さもあるため、実習に取り入れる難しさはあると思います。

報告書：演習 6-1 MTDLP によるマネジメント過程の実践

グループ 9 世話人氏名：荒木一博

GW 司会者：森内慎也

記録者：荒木知沙

発表者：植木百合子

学修目標

MTDLP を活用した作業療法の臨床実践課程を概観し、作業療法参加型臨床実習における MTDLP の活用の仕方を学習し、その特徴を理解する。

発表の要点 (キーワード)

1. 対象者、指導者、学生の共通認識ができる
2. 指導者側が MTDLP を理解するという課題がある
3. 学生が対象者を理解しやすい

グループワークで議論された内容

<MTDLP を臨床実習指導に取り入れるメリットと課題>

メリット

- ・部分的に活用している。理解を深めるためにアセスメントシートなどを活用している。
- ・実践した学生はケースをきちんと把握できていた。
- ・学生にとっても道筋となるし、指導者としても学生の把握状況がわかりやすい。
- ・対象者、指導者、学生の認識が共通として持ちやすい。
- ・訓練の意味づけという点では役に立つ。
- ・ケース記録の形式として MTDLP を使用する方法もある。

課題

- ・シートの活用はデイリーノートなどに加えて負担になるのではないか。
- ・急性期では使いづらい。使用前に退院となるケースが多い。
- ・カルテに加え文字に起こすという手間がかかる。頭の中で整理したままで終了しやすい。
- ・精神科ではあてはめて実践できていない。
- ・学校からの意向として積極的に使用してほしいのかどうなのか。
→現状、MTDLP がまだ浸透していない。指導者側の課題となる。

感想

対象者を理解しやすいこと、学生の理解状況を把握しやすいこと、共通認識を持ちやすいことなどのメリットがあり、課題も多いが、部分的な使用でも活用することは有効であると感じた。MTDLP を使用することで、より臨床の場を体感でき、学生にとっても強みとなると思った。

報告書：演習 6-1 MTDLP によるマネジメント過程の実践

グループ 10

世話人氏名： 井戸 佳子

GW 司会者： 中島 輝

記録者：吉原 司

発表者：齋藤 将司

学修目標

MTDLP を活用した作業療法の臨床実践課程を概観し、作業療法参加型臨床実習における MTDLP の活用の仕方を学習し、その特徴を理解する。

発表の要点 (キーワード)

1. 見える化、可視化できる (文字におこしているのだからわかりやすく、学生と共有しやすい)
2. 指導者がどれだけ MTDLP をつかえるか (経験値)
3. より「生活面」への着目を促せる

グループワークで議論された内容

<MTDLP を臨床実習指導に取り入れるメリットと課題>

○メリット

- ・アセスメント～プラン作成の流れが見える⇒指導者と共有
- ・生活行為に目を向けやすい
- ・学生は機能面に目がいきやすいが、予後予測を生活面でより具体的に考えられる
- ・各項目の一覧が記載されているところから、抜け落ちにくい
- ・文字におこす⇒紹介しやすい、振り返りやすい
- ・各段階での、学生の思考過程のプロセスを理解しやすい

○課題

- ・指導者が MTDLP をきちんと理解しておく必要がある
- ・指導者の経験値に左右される、質の担保が問われる
- ・時間がかかる、時間の余裕が必要
- ・領域による問題であるが、MTDLP はトップダウンの考え方が基本だが、ボトムアップで考えなければいけない場合もある

感想

- ・ちゃんとつかおう！つかってみなければわからない！（使える、使えないかではなく）
- ・精神科領域の MTDLP のスムーズな利用の方法やコツを知りたい。
精神科では、3～4 か月で一連の流れを体験できる機会が少ないので、各段階での工夫が必要だと思う。
- ・精神科では利用が難しい面もあるかもしれないが、再度、自分がやっている活動を分析し、振り返る作業は必要だと感じた（危機感）。

演習 6-2

事例報告書の作成

報告書：演習 6-2 事例報告書の作成

グループ 1 世話人氏名： 末武 達雄
GW 司会者：岩永 裕人 記録者：犬塚 祥子 発表者：江崎 祐介

学修目標

臨床思考過程を踏まえた明確な事例レポート作成の意義・目的を理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 学生の特性に合わせて報告書の書式・デザインを変更してまとめやすくする
2. 学生の得意を活かしたまとめ方を指導する
3. 報告書だけでなく日々の FB で理解度の確認及び CE の考えを伝える時間を作る

グループワークで議論された内容

<事例報告書を A4・2枚程度で作成するときの内容>

- ・本人の目標や生活歴など含めた内容。指導された内容や患者さんの変化や学生の考えが変わった内容など全て入れてもいいのではないか。
- ・一般情報、ICF、治療プログラム、ゴールは必須である。
- ・生活背景、今、患者本人が困っている事は必要である。
- ・目標設定は大事、学生は抽象的な目標を立ててしまう為、目標を細かく段階づけて記載することも必要。その理由も記載できればよい。
- ・変化を入れてもよいと感じたが枚数が足りなくなりそう。
- ・大きな流れは変わらないが、MTDLP などでは活動などがメインとなって来ると思うので各所で深めて記載できればいいのではないか。
- ・言葉にする事が学生は難しい為、得意な事を活かすとすると（パソコンや図式化、樹形図の利用など）スライドなどにするのも良い。文字だけではない、学生個々に合わせた作成でも良いのではないか。
- ・2枚目は思考過程がわかるような目標とプログラムのつながりなどわかりやすく記載できれば良い。2枚目のうち1枚は情報、1枚は考察を記載できるような形。文章力がない学生でも学生の思いや考えを出しやすいように。

<学生の臨床思考過程の理解を確認するための方法>

- ・記載の流れは大きく変えなくても、発表の方法やレジュメ作成方法などを学生個々で選択できるものに変更していけば、学生の思考過程の理解も確認しやすくなっていくのではないか。
 - ・学生とコミュニケーションを取る中で確認していく。
 - ・言葉にしていく場面を作ってもいいのではないか。
- 文章に起こす事が苦手な学生と得意な学生の見極め
フィードバックでは、図で書いた方がわかりやすいのか、文章の方がわかりやすいのか、判断出来たらよい。
- 指導の工夫
- ・苦手な所は得意を生かして指導して行く。動作分析などは許可を得た患者様の動画を一緒に見て行うなど（動画であればスローにして確認もしやすい）。
 - ・ある程度、枠組みを決めた方が学生も行いやすいのではないか。
- 養成校への要望
- ・臨床では学校側に合わせてレジュメの作成も行って行く事が多いが、発表に関しても養

成校ごとに決まりが違う為、統一してほしい。

・学生が実習に出る前に、自身の意見を出す、伝える経験を積んでいる場合が少ない（学校では受動的な講義が多いのでは）。グループワークなどの経験を積んでもらうと、自身の理解度を言葉で伝えられやすくなるのではないかと。

感想

今の学生に合った方法で発表やまとめができれば学生の理解も進むし、教える側としても理解度を確認しやすいのではないかと思います。苦手な部分を学生の得意とする部分で補えたら、学生の特性も活かしやすいと感じました。

報告書：演習 6-2 事例報告書の作成

グループ 2 世話人氏名：村木敏子

GW 司会者：岩本悠

記録者：勝元 笑利奈

発表者：山口数友樹

学修目標

臨床思考過程を踏まえた明確な事例レポート作成の意義・目的を理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 自分の考えを可視化するためにはいろんなツールを使っていく
2. 考えを表現するには文字だけでなく絵や単語なども利用していく
3. まとめる力は臨床場面で必要になってくるが、学生の能力にもよるため、実習期間だけですべてを網羅する必要はないのではないか

グループワークで議論された内容

<事例報告書をA4・2枚程度で作成するときの内容>

- ・一般情報もだが、患者さんの思いを記載する。
- ・何を重視するかによるが思考過程すべてを記載するにはA4では足りないのではないか。
- ・分野によって変わっていいものなのか、学校によつての課題の違いがあるのか。
- ・実習の時期によって、学んでほしいことも変わってくる。
→例) 初めての实習：臨床の雰囲気を知る。一連の思考過程も触れる。
- ・学生は障害がある現状に目が行きやすい→生活をイメージする。まずは学生自身の生活もイメージできるように。
今までのレポートだと目標設定・考察が最後。どのような生活をイメージして設定したのか考えたうえで評価していくのも良いのではないかと。
- ・対象の患者さんの未来を創造していく声かけが必要。
- ・考察ばかりが多くなることもあるが学生が関わったうえでの変化も経過に沿って記載が必要。
- ・学生に実習の目的を事前に確認し、そこに重きをおいて主体的な取り組みを引き出す。
- ・レポートの項目の順序にそつてまとめていくと躓いた点で止まることがある。
- ・客観的評価も必要、変化した点の記載も必要。
- ・事例報告は担当症例の為が理想であるが、現状は学生の課題のためになっている。
- ・学生ならではの視点を知ることできる。
- ・学生の頃は実習の課題だと思つていた、後で見返した時に学生に繋がる内容にしたい。
- ・臨床での学会発表をする際にまとめた経験は参考になった。

<学生の臨床思考過程の理解を確認するための方法>

- ・普段の見学の際にどのくらい理解しているのかを実際に見る。表現は苦手だが、細かく聞いていくと理解できていることもある。
- ・可視化した確認ツールがあるとわかりやすい。
- ・SOAPで文字に落とし、自身の言動も残すことでアセスメントがしやすかつた。
- ・絵で自身の思考をレポートとして書いたことがある。
- ・文章で書けなければ、単語だけでも。繋がりなどフィードバックしながら一緒に考えていった。
- ・臨床場面でも多職種などに端的に必要な事項を伝えていく必要はある。
- ・学生の能力にもよる。実習で全部をやらなければいけないわけではないのではないか。

感想

現在のレポートの項目や客観的評価も必要であるが、患者さんの思いを重視し、目標を立てる上で、どのように生活をイメージしたかを初めに考え記載していく形もいいのではないのかと感じた。学生のためではなく、患者さんのための事例報告として考える必要もあり、まとめる事が難しいのであれば、絵や単語など様々な方法を交え指導者と考えていく。臨床現場では、まとめる力は自ずと必要になってくるが、学生の能力にもよるため、実習期間のみで全てを網羅しなければならないと考える必要はないのではないかと感じた。

報告書：演習 6-2 事例報告書の作成

グループ 3 世話人氏名：田中 剛

GW 司会者：松山美紀 記録者：川口幹

発表者：長谷川朔子

学修目標

臨床思考過程を踏まえた明確な事例レポート作成の意義・目的を理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 図や絵、MTDLP を活用して思考過程を表現する
2. 本人の希望や目標に基づいて、評価内容、問題点、計画等を記載する
3. 主担当以外の対象者に関わる際に、会話を通して思考過程を確認する

グループワークで議論された内容

<事例報告書を A4・2 枚程度で作成するときの内容>

- ・一般情報や医学的情報は必要
- ・本人の希望を書く
- ・目標に向けた考え
- ・思考過程を絵や図に表す
- ・本人の思いや目標をまず記載し、それらに基づいた評価や課題を記載する
(心身機能の評価から記載しない)
- ・患者、セラピストの満足度の評価を行う
- ・COPM を用いて、患者の思いに基づいた実践の表現ができる

<学生の臨床思考過程の理解を確認するための方法>

- ・主担当は指導者と一緒に考え、主担当以外で MTDLP のシートを記入してもらう
- ・的を得たプログラムを立案できるか、会話の中で確認する
- ・一緒に患者さんをみている際に、評価の分析、計画を言ってもらう
- ・実施した後に振り返る時間を持ち、経過の中で変化があるかを見ていく
- ・患者さんを一緒にみているときに、目的や評価結果を伝え、どのように関わるかを考えるように問う
- ・関わった患者さんについて考えたことをデイリーノートに書いてもらう

感想

事例報告書の内容を考えるのは非常に難しかった。患者の思いに基づいた作業療法の実践が表現できることが重要という考えは共通していた。

臨床思考過程の確認は、最初の症例は一緒に行った上で、他の対象者と関わる機会を活用し、身につけているかを確認するという方法がお互い負担なく行えるのではないかと感じた。言葉での表現が難しい学生にはデイリーノート等書く手段を用いた方がよいと思う。

報告書：演習 6-2 事例報告書の作成

グループ 4 世話人氏名： 中村 義博

GW 司会者：石本昭仁

記録者： 古賀慎治

発表者：松本奈津美

学修目標

臨床思考過程を踏まえた明確な事例レポート作成の意義・目的を理解する。

発表の要点 (キーワード)

1. 考察に比重を置くために (MTDLP の活用)
2. 学生の理解度の確認の為、ディスカッションや発表・提出物での確認
- 3.

グループワークで議論された内容

<事例報告書を A4・2枚程度で作成するときの内容>

臨床思考過程が伝わるような事例報告書を作成するためには：

MTDLP を利用したら、文字を打ち込むスペースが少ない・入れ込むのが難しい幅が狭い

・A4 二枚、一枚は生活行為向上マネジメントシート、もう一枚は考察にするとわかり易いのではないか。

- ・考察に比重を置く。

<学生の臨床思考過程の理解を確認するための方法>

- ・質問に対して返答が出来るか。

- ・デイリーなどの書類を確認する。

- ・学生に発表の機会を持ってもらう。(ランチョン形式で発表している施設もある。)

思考過程を確認して、付随する評価を入れていく。考察の中に、結果を検証し、次の行動を考えていく。考察の中身を、バイザーと考え分析していく。学生の意見を尊重 している。

- ・バイザーの担当をずっと見ていると、気付きが出やすい。他のセラピストに考察を見てもらい、レポートを他者に見てもらいと学生の思考過程が気付けるのではないか

- ・自己評価してもらう。学生自身がどうとらえているか、(わかっているつもりになっていないか)

感想

A3 程度にまとめるのが、書く側の負担 (OTS) 読む側の負担 (指導者) 双方に減るのではないかと思った。MTDLP の活用が出来るようになることで、可視化できるため、見通しをもって取り組めるのではないか。難しい症例では、マインドマップなどを活用し何故そう思ったのかを可視化していく事で、思考過程を確認できるのではないかと思った。

臨床思考過程を確認する為には、ディスカッションなど、FB 中の知識の確認や発表の機会の重要さも改めて思うことが出来た。

報告書：演習 6-2 事例報告書の作成

グループ 5

世話人氏名：大坪 建

GW 司会者：萩野裕樹

記録者：片町奈緒

発表者：甲木 俊

学修目標

臨床思考過程を踏まえた明確な事例レポート作成の意義・目的を理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 本人の Demand（希望や要望）をもとに、全体像をまとめる
2. 学生に自分の考えを言語化する機会を設ける（発表やディスカッション）
- 3.

グループワークで議論された内容

<事例報告書を A4・2枚程度で作成するときの内容>

- ・生活歴
- ・一般情報
- ・全体像 ⇒問題点の抽出
- ・本人、家族の needs
- ・家庭や対象者が過ごすところの役割、関係性
- ・本人の Demand（要望、希望）から必要な内容をまとめる

<学生の臨床思考過程の理解を確認するための方法>

- ・発表をする機会を設ける（学生に自分の考えを言語化する機会を設ける）
- ・学生と指導者が MTDLP や ICF を活用して考えを伝える
- ・学生と指導者がお互いの思考を擦り合わせる時間をとる（ディスカッション等）

感想

MTDLP などを活用して学生の思考過程を確認していきたい
指導者も普段から自分の考えを言語化することを意識したい

報告書：演習 6-2 事例報告書の作成

グループ 6 世話人氏名：鎌田秀一

GW 司会者：畑田 美恵 記録者：馬場 徳子

発表者：下田 莉華子

学修目標

臨床思考過程を踏まえた明確な事例レポート作成の意義・目的を理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 事例報告書は MTDLP を使いながら、各評価項目等を加えながら作成する。
2. デイリーノートを通して MTDLP、各評価等の理解度を確認する。
3. 理解度を確認は MTDLP のアセスメントシートを学生と作成していく中で、ディスカッションを通して行う。

グループワークで議論された内容

<事例報告書を A4・2 枚程度で作成するときの内容>

- ・MTDPL に落とし込んだだけでは思考過程を把握するのは難しいため、患者さんの望みとそのゴール設定の過程など MTDLP の内容を考察の中にでも書き込む。評価にストーリー性を持たせていく。
- ・結局は今までの医学的所見や身体機能も必要。臨機応変にいままであった様式をアレンジする。
- ・考察に今後の展望などを書くことで MTDLP の内容を反映させていく。
- ・本人の目標とする活動に伴う環境を項目に足す

<学生の臨床思考過程の理解を確認するための方法>

- ・MTDLP を最初に作成して修正を加えながら、ディスカッションをするなかでその根拠をその都度問いながら進めていく。
- ・アセスメント演習シートの記入しながら確認していく。
- ・従来の報告書もまとめて書くのではなく、一つ一つうめながら進んでいくことや、その進行状況の確認にデイリーノートを活用することで一緒に考えることができるのではないか。デイリーノートの書く内容も指導者側からある程度枠組みを先に与える。
- ・ことばにすることが難しく書くことがうまくできない学生さんに対して、MTDLP を通してディスカッションの機会を多く持つことで言語化しやすくなり、考えていることが具体化されていく。

感想

MTDLP をうまく事例報告書に落とし込む作業がなかなかイメージできない部分もあり、従来のスタイルをガラリと変える発想の転換はなかなかしにくい印象がありました。まずは従来のスタイルの考察の中からも反映していくことから考えてもよいのではないかと思います。

報告書：演習 6-2 事例報告書の作成

グループ 7

世話人氏名：牧山美穂

GW 司会者：林田浩司

記録者：松本康宏

発表者：森園亜由美

学修目標

臨床思考過程を踏まえた明確な事例レポート作成の意義・目的を理解する。

発表の要点 (キーワード)

1. MTDLP に考察を添えて活用
2. ディスカッション
3. 合意目標に沿ったもの

グループワークで議論された内容

<事例報告書を A4・2 枚程度で作成するときの内容>

ICF や MTDLP に沿った思考過程を、考えた順で記録していく

MTDLP の使えるシートだけを使用しながら、まとめていく

MTDLP や ICF カンファレンスシートなどにプラス、考察などを記入する

本人の目標及び MTDLP の合意目標に沿って記録していく

(まとめ)

A4 一枚に MTDLP アセスメント演習シートを、もう一枚に考察や思考過程を書き添える

<学生の臨床思考過程の理解を確認するための方法>

指導者とのディスカッションの機会を多く持つ

基本的にその場でフィードバックして、理解しているか確認していく

MTDLP などをもとに他のスタッフを含め確認していく

事例報告書とは別に、模倣や実施を行う前に一緒に計画書や企画書を元に指導者が思考過程を確認する

ICF や MTDLP を元に思考過程を確認し、発表する場を設ける

面接における事前に企画書の提出

タイムリーなフィードバック、ディスカッションを口頭ですていく

学生が記録したメモ帳を元にディスカッションする

感想

学生が知り得た情報、素材を元に、整理する思考過程と一緒にディスカッションしていくことが重要であると感じた。

学生が集めた情報を、タイムリーに消化、整理していくことが必要であると感じた。

報告書：演習 6-2 事例報告書の作成

グループ 8

世話人氏名： 久毛 希

GW 司会者： 大久保英梨子

記録者： 荒木泰斗

発表者： 荒木泰斗

学修目標

臨床思考過程を踏まえた明確な事例レポート作成の意義・目的を理解する。

発表の要点（キーワード）

1. テーマ 1：MTDLP の表を活用する
2. テーマ 2：学生と密にコミュニケーションを行う中で、臨床思考過程を確認していく
3. テーマ 2：学生の考えを簡単にでも良いから書面に残す

グループワークで議論された内容

<事例報告書を A4・2 枚程度で作成するときの内容>

- ・記載内容例に加え、結果・経過、考察を記載する
- ・介護保険や利用しているサービスの記載
- ・MTDLP のマネジメントシート等を一部抜粋して使用する
- ・ICF の部分は MTDLP の表を用いて記載をする
- ・利用者様、患者様の想いが分かる内容
- ・一連の繋がりが分かる記載方法
- ・機能障害がどのような問題を起こしているかが分かる記載方法（例：#1 を使う等）
- ・カルテ上の情報や画像所見
- ・マインドマップを活用
- ・吹き出しに自身の考えを書いてもらう
- ・図式化して見える化する

<学生の臨床思考過程の理解を確認するための方法>

- ・フィードバック時や見学時に学生に聞く
- ・他の患者様の見学時にも臨床思考過程を聴いてみる
- ・日誌、デイリーノートを活用する
- ・一つ一つの事を学生に聞き確認する
- ・口頭で聞ける質問を書面化して答えてもらう
- ・デイリーノートを活用し、学生の思考過程を確認する
- ・ディスカッションを学生と行う
- ・質問事項や気になった点はその都度メモを取ってもらい、後で確認する
- ・1 分間スピーチ
- ・短文でも良いから学生の考えを書いてもらって書面に残す
- ・臨床思考を確認する前に、指導者と学生の関係性が良いものになるような関わりを行い、何でも話せる関係性を作るようにする

感想

テーマ 1 では、今までの記載方法の形にとらわれず、MTDLP の表を活用するなどといった意見も出て、見ている方も分かりやすそうだなと感じた。

テーマ 2 では、学生の考えていることを把握するためには、レポートより簡単で時間も要さないやり方は容易ではないなと感じた。その為、学生とのコミュニケーションの中で思考過程を把握するためには学生・指導者間の信頼関係の構築が不可欠だなと感じた。

報告書：演習 6-2 事例報告書の作成

グループ 9 世話人氏名： 荒木 一博

GW 司会者：平本 陽一 記録者：本田 敏也 発表者：森内 慎也

学修目標

臨床思考過程を踏まえた明確な事例レポート作成の意義・目的を理解する。

発表の要点（キーワード）

1. MTDLP 各シートの使用（双方が整理、理解できる）
2. 学生と指導者が一緒に作成する（一緒に悩む）
3. 学生の発言、行動の観察（指導者と過ごす時間で学生がどう変化しているのか）

グループワークで議論された内容

<事例報告書を A4・2 枚程度で作成するときの内容>

- ・ ICF の図に評価などの情報を入れてしまう。一つの図にまとめる。
- ・ 統合、解釈、経過
- ・ MTDLP シートと生活行為課題分析シートの活用でまとめる。（講義中にあった例は双方理解しやすい）
- ・ 順番を変える。
- ・ ナラティブな形式での作成。
- ・ 症状を前面に出すなら写真を使用し、イメージ化しやすい。

<学生の臨床思考過程の理解を確認するための方法>

- （エクセルシートをコピーアンドペスト）
- ・ わからないところは指導者がフィードバック内で一緒に作成する。
- ・ 一症例に対してフィードバック中に一緒に作成する。
- ・ 指導者が学生に大まかなフローチャートを作成させる。作成後チャートについての学生からの説明と指導者の質問を行う。
- ・ 指導者と過ごすなかで会話、言動で学生がどこまで理解しているかわかる（最初はできなかったことができるようになっていく）。
- ・ 自分の分身を作る。アシスタントのような存在になれば、それが成長していることではないか。（CCS により、一緒に過ごす時間が増えたため）
- ・ 指導者もわからないことや悩んでいることは正直に伝える。
- ・ 学生さんが作成した患者さんの記録を見ながらフィードバックする。

感想

報告書は学生が躓くものの一つであると感じている。学生と指導者がうまく活用できるような形式があれば、実習もうまく進むのではないかと思う。指導者も学生によっては、指導内容に困ることもあるので、学生が文字に起こせない部分を引き出せればと思う。

報告書：演習 6-2 事例報告書の作成

グループ 10

世話人氏名：井戸佳子

GW 司会者：吉原司

記録者：齋藤将司

発表者：林田万由

学修目標

臨床思考過程を踏まえた明確な事例レポート作成の意義・目的を理解する。

発表の要点（キーワード）

1. MTDLP の合意形成等の反映
2. トップダウンの思考を報告書に反映
3. ポートフォリオ評価を用いる

グループワークで議論された内容

<事例報告書を A4・2 枚程度で作成するときの内容>

- ・既存の一般情報といった内容に加えて、MTDLP シートの中身を活用、生活行為の目標設定に至る経緯、合意形成について
 - ・どういった経過を経て介入したのか
 - ・一般情報・医学的情報などの後に、介入結果が最終的にどうなったのか記載を行う方法も良いのではないかと（レジユメの形にこだわりすぎる必要はないのではないかと）。
 - ・精神科：疾患の評価やプログラムがパターン化した内容を記載し、対象者に沿った内容ではないこともある。→レジユメの形にこだわりすぎているのではないかと
 - ・最初から文字に落とし込むことは難しいかもしれないので、記載するときは指導者からのアドバイスを参照する。

<学生の臨床思考過程の理解を確認するための方法>

- ・マネジメントシートの利用
- ・問題点を上げて、指導者とともに図式化して内容の理解に努める
- ・生活行為に問題が生じている場合に、どういった原因が関連しているのか、書き上げる
- ・なぜ歩けないのか、なぜ運動麻痺が出ているのかといった現象に対して、数例似たような症例とともに考える。初めは理解度を深めるために説明を中心に行い、2、3 例目から学生に説明をしてもらう。
- ・病院独自の報告書を作成（見学、模倣、実施の手順を踏んで）→事例報告書の作成へ
- ・急性期などの場合は 1 ケースの経過を追うのは難しい。ポートフォリオ評価を用いて自身の評価、ケースごとの評価を書く。
- ・セラピストの話を書く事も臨床思考過程の理解を深めることになっているのではないかと（レポートだけに時間をかけすぎない）。

感想

既存の項目に沿って記入することに拘らず、MTDLP シートの活用や内容の反映、記載の順番等も柔軟に変更して良いのではないかと考える。また、臨床思考過程の理解について確認すべく、ポートフォリオ評価等を用いて段階的に指導をしていくことも重要だと考える。

演習 7

作業療法参加型臨床実習の理解

報告書：演習 7 作業療法参加型臨床実習の理解

グループ 1

世話人氏名：末武 達雄

GW 司会者：山田 麻和

記録者：朝永 耕平

発表者：宮腰 昇

学修目標

見学—模倣—実施の指導方法について、実践場面を想定した演習を行い、作業療法参加型臨床実習の理解を深め、効果的な臨床実習のプログラムを検討し立案する。

発表の要点（キーワード）

1. 測る目的を説明し、視診・触診を経て MMT の見学に移る。手技は教科書で確認する。
2. 事前に確認したことを含め現状での理解度を確認し、目標を明確にする。
3. 病院内でデイリーなどを終わらせ、FB もできるよう机上/FB 時間を確保する。

グループワークで議論された内容

<MMT 評価場面における見学—模倣—実施を基盤とした指導方法・工夫>

見学レベルを検討

- ・○○の MMT を測ることを事前に伝えておく。
- ・どうして測るのか、必要性、生活にどう繋がるのかを伝える。
- ・教科書を見ながら確認する。
- ・目的を確認、反復してもらう形で理解度を確認する。
- ・基本的な肢位の確認
- ・片麻痺など それぞれの疾患で動かす際のリスクを伝えておく。
- ・MMT 前に実際に患者の視診・触診を行うと良い。
- ・幼児者の筋力など特殊なパターンも見学してもらう。

<週 45 時間以内という時間の中で効果的な臨床実習を行う工夫>

- ・見学だけに留めず、模倣レベルまで経験してもらい、幅を広げていく
- ・「何が出来たら次に進める」のような明確な基準があれば学生のモチベーションになるのでは（ルーブリック評価の充足を期待）
- ・活動後に振り返るためのシートを簡単に作成しフィードバックをする。保管し、その場でも伝えられるし、後から追加して指導を書き込むことができる。（病院側での FB シートの統一）
- ・「今はこのレベル」ということを伝えるために、研修資料の赤字で書いている部分をそのまま伝える。
- ・余裕を持って指導をするため指導者側にも事前準備が必要。
- ・養成校の先生に相談しやすい状況ではない場合も多いため、大事になる前に相談できる関係性が作られると、FB などに時間がかりすぎるのを予防できるのではないか。
- ・目標を明確化していく（スタッフの負担か？）、業務の時間内で一緒に見ていく。
- ・悩む時間を減らせるよう、必要に応じて見学の量を調整する。机上活動時間を与えることも必要か。
- ・学生は業務の時間内にデイリーノートを仕上げ、その日のうちにフィードバックを行う。

感想

- ・事前にリスクや測定箇所を伝えた上で学生の準備を促すことで、スムーズに見学場面での理解に繋がりがやすいのではないかと感じた。
- ・学生の目標を明確化することで学生のモチベーションに繋がるのではないかと感じた。
- ・学生の負担とならないように、学生の机上時間、自主学習時間を確保する等の対応を行っていくことも大切だと感じた。

報告書：演習 7 作業療法参加型臨床実習の理解

グループ 2 世話人氏名 村木 敏子

GW 司会者：勝元 笑利奈

記録者：吉村 梓

発表者：岩本 悠

学修目標

見学-模倣-実施の指導方法について、実践場面を想定した演習を行い、作業療法参加型臨床実習の理解を深め、効果的な臨床実習のプログラムを検討し立案する。

発表の要点（キーワード）

1. 見学する前に検査について詳しく説明を行う。
2. 見学は実習生と指導者が関わる第一場面であるため、今後質問しやすい雰囲気作りのためにもコミュニケーションがより重要。
3. 学生の実行状況や目標を養成校と共有し、学生が主体的に取り組める環境を作る。

グループワークで議論された内容

<MMT 評価場面における見学-模倣-実施を基盤とした指導方法・工夫>

(見学について)

- ・前日に学生に評価項目を伝え、準備(心の準備や学習)をしてもらう。
- ・測定する肢位などを伝え、何のために検査するのかを伝えて見学してもらう。
- ・新人の OT も含めて、見学を行う。学生は、それを見て心の準備が出来る。
- ・教科書では分からないこともあるので、細かく指導者が伝達する。
- ・実際の力の入れ方やリスクも伝えておく。
- ・事前にどこを見ておくべきか学生に伝える。
- ・学生とともに教科書を使って勉強する。

(理解度の確認)

- ・実際に学生に聞いて確認する。どこまで分かったかまで。
- ・測定肢位や、測定方向など、細かく聞いていくと学生も答えやすい。
- ・実際に指導者で確認することで、分かりやすいのではないか。
- ・学生と指導者が関わる第一段階になるため雰囲気作りは大事だと思う。

<週 45 時間以内という時間の中で効果的な臨床実習を行う工夫>

- ・実習のスケジュールを学生と一緒に作成することで余裕を持った実習が送れないか。
- ・事前に目標や達成度を明確にしておく、スケジュールが立てやすい
- ・時間の制約もあるため、指導者も効率のいい FB 方法や時間の作り方を考える。
- ・家での課題にどの程度時間がかかっているか適宜確認し、負担になっているようであれば一緒に時間内に行うなど、自宅で行う課題が負担にならないよう配慮する。
- ・困っている所をすぐ聞けるような関係性作りを意識する。

感想

見学を行う前に細かく説明を行うことで、学生は心の準備や勉強してきたことの再確認が余裕をもってできるのではないかと感じた。指導者から細かく質問していくことで学生がどこまで理解しているのかが分かると思うが、指導者の質問の仕方や雰囲気は今後の実習に繋がっていくため（質問しやすい雰囲気かどうか学生が感じると思うため）注意も必要だと考える。

実習のどこに重点を置くのかを、学生や養成校、実習地で共有し目標や課題を明確にすることで効率的に実習が進められると考える。そのために今までの実習の進捗状況など情報共有を深く行うことが重要になってくると考えた。

報告書：演習7 作業療法参加型臨床実習の理解

グループ 3 世話人氏名：田中 剛

GW 司会者：菅崎 流理 記録者：川口 徹 発表者：長谷川 朔子

学修目標

見学-模倣-実施の指導方法について、実践場面を想定した演習を行い、作業療法参加型臨床実習の理解を深め、効果的な臨床実習のプログラムを検討し立案する。

発表の要点（キーワード）

1. 事前学習をしてもらう、ポイントも伝えておく
2. 職場でコミュニケーションをとり準備、計画を立てておく
- 3.

グループワークで議論された内容

<MMT 評価場面における見学-模倣-実施を基盤とした指導方法・工夫>

【見学レベル】

- ・見学前日に測定部位を伝え、予習してもらっておく
- ・学生に分かりやすく伝える工夫を心がける
- ・学生が動きやすい（評価を行いやすい）場所を準備しておく
- ・重点を説明し理解しているか聞く
- ・筋の起始停止を確認、患者さんの負担が少ないよう姿勢や力加減を共有しておく

<週 45 時間以内という時間の中で効果的な臨床実習を行う工夫>

- ・業務時間内に終わることができるよう時間を取っている
- ・必要最小限の指導を心がける
- ・同僚の理解と協力を得られるようお話しする
- ・職場の先輩などに指導方法などを相談する
- ・実習の予定をしっかりと組んでおく
- ・実習生との関係性を築きやすい雰囲気づくりを心がける

感想

見学レベルでの指導方法・工夫では、事前に測定する部位を伝えておき、自己学習をしておいてもらう。また、筋の走行や対象者へ負担が少ない測定姿勢や力加減や注意すべきポイントについてもバイザーと学生での共有を行っておくことが大切だと考える。

効果的な臨床実習を行う工夫では、職場のみんなの理解や協力を得られるようコミュニケーションをしっかりととっておき、スムーズに実習が運ぶよう事前に指導者も準備しておく必要があると考える。

報告書：演習7 作業療法参加型臨床実習の理解

グループ 4

世話人氏名： 中村 義博

GW 司会者： 松本奈津美

記録者：平川拓視

発表者：桑原小牧

学修目標

見学-模倣-実施の指導方法について、実践場面を想定した演習を行い、作業療法参加型臨床実習の理解を深め、効果的な臨床実習のプログラムを検討し立案する。

発表の要点（キーワード）

1. 簡単な個所から行い失敗体験をさせない
2. 事前の手技の確認、リスク管理の確認を重要視する
3. 実習生に応じて課題量の調整を行う

グループワークで議論された内容

<MMT 評価場面における見学-模倣-実施を基盤とした指導方法・工夫>

- ・徒手抵抗を加えるので事前のリスク確認が重要なのではないか。
- ・測りやすい所を優先的に学生さんをお願いする。失敗体験にならないように配慮する。
- ・対象者によっては検査姿勢を取りにくいいため、簡単な姿勢で行えるものを選択する。
- ・触り方に注意して指導する。
- ・MMT 5 の抵抗、4 の抵抗を模倣的に実践して行うようにする。
- ・抵抗を感じやすい箇所（肩 etc）から選択する
- ・指示理解が良好な患者さんに行ってもらおう。
- ・ROM 制限がない箇所に対して実施してもらおう。

<週 45 時間以内という時間の中で効果的な臨床実習を行う工夫>

- ・就業終了 1 時間前から記録の時間を設けている。学生の記録が終わった後にフィードバックを行い、できるだけ課題を持って帰らないようにしている。
- ・調べ物があるときはバイザーも一緒に調べる。
- ・業務内に学生の自己学習時間を設けるために同僚に協力を依頼する。
- ・学生の能力に合わせて記録の時間は調整する。自宅において短時間で課題に取り組めるのであれば業務時間いっぱいを見学を使う。
- ・提出書類を養成校に確認しておく。
- ・睡眠時間などの学生の体調面を適宜確認する。
- ・学生の実習の開始時間、終了時間を明確にする（早めに来させない、残さない）。
- ・学生が学びたいことを優先する。必要があれば、書類の提出も求めない。

感想

見学-模倣-実施を基盤に進めていく事で、実習生の理解に加え、指導者のスキル向上にも繋がると感じた。しかし、時間の確保やどの基準で次の段階に進むのかの見極めが難しいと思った。

また、実習を効率的に進めるためには、実習生に応じて課題量の調整を行う、フィードバックの時間を実習時間中に確保するなど指導者側の配慮が大切だと感じた。

報告書：演習7 作業療法参加型臨床実習の理解

グループ5

世話人氏名：大坪 建

GW 司会者：5-1 串間慎吾

記録者：5-2 定村千穂

発表者：5-4 平大地

学修目標

見学-模倣-実施の指導方法について、実践場面を想定した演習を行い、作業療法参加型臨床実習の理解を深め、効果的な臨床実習のプログラムを検討し立案する。

発表の要点（キーワード）

1. リスク管理
2. 評価目的をはっきり確認
3. スケジュールで見通しを立てておく

グループワークで議論された内容

<MMT 評価場面における見学-模倣-実施を基盤とした指導方法・工夫>

模倣レベル

- ・マニュアルやリスク面
- ・どの筋肉のどの動作を見るのかの確認
- ・注意点、どこの筋肉を見たいのかを確認して実際に見本を見せてやってもらう。その後フィードバックしていく。
- ・ADLで支障をきたす部分を確認し評価する
- ・指導者で練習してから患者様の実践へつなぐ
- ・実施後フィードバックでよかった点を伝える
- ・患者様に今から行うことを説明する

<週45時間以内という時間の中で効果的な臨床実習を行う工夫>

- ・全体のスケジュールを決めておく
- ・AMとPMの活動ごとに分けてフィードバックしていく
そして夕方にまとめのフィードバックをおこなう
- ・課題ごとに期限を決めて進めていく。間に合わなければ指導者がフォローする
- ・時間をうまく使う
- ・見えないところのフォロー(自宅学習など)をおこなう

感想

- ・実習時間だけでなく、実習外も気にかける
- ・自分自身の体験を、学生に押しつけないようにしていきたい
- ・45時間を意識していなかったのが今後気にかけていきたい
- ・学生を守るためのルールだがそのしわ寄せが指導者にこないようにしないといけない。

報告書：演習 7 作業療法参加型臨床実習の理解

グループ 6 世話人氏名：鎌田秀一

GW 司会者：岩本泰幸

記録者：川口末世

発表者：堤逸人

学修目標

見学-模倣-実施の指導方法について、実践場面を想定した演習を行い、作業療法参加型臨床実習の理解を深め、効果的な臨床実習のプログラムを検討し立案する。

発表の要点（キーワード）

1. 実施前に事前に疼痛等のリスク管理の説明を行う。
2. 模倣レベルでの介入を行う前に、対象者の方を想定した事前練習を学生と行う。
3. 患者さんの選定、模倣実施時の疲労や疼痛の有無に注意が必要。

グループワークで議論された内容

<MMT 評価場面における見学-模倣-実施を基盤とした指導方法・工夫>

【模倣】

- ・模倣を行う前に確認 模倣レベルに行くまでに見学レベルで理解できた点を確認する。
手技だけでなく見学の際の視点など。
痛みなどのリスク管理
評価者の力の入れ方など、見学だけでは伝わらないこともあるため、患者さんに行う前に対セラピストでデモを行うなど練習を行う。
- ・患者さんの選定に配慮する。
見学→模倣なので同じ評価を対象者へ強いることになる。
患者の疲労に配慮する。
- ・評価時にあまり指導者が口出しすると、患者に不安を与える。身構えてしまうので、配慮が必要。

<週 45 時間以内という時間の中で効果的な臨床実習を行う工夫>

- ・見学をしている時間が長く、見学したすべての対象をデイリー等に記載するとそれだけで数時間かかる・・・ある程度枠組みを提示してあげると、効率的に記載できるのでは。
- ・養成校にデイリーなどの報告書書式を詳細に作成してもらう
- ・学生にフリーの時間を与えてみる。自己学習や記録など、学生自身が使い方を
- ・見学の合間などをデイリー作成などの時間に当ててもらおう。
- ・報告書を実習地でも作成できるようにPCなど持ち込んでもらう。
- ・事前の予習として実習に入る前に評価や訓練方法など
- ・17時を過ぎたらすぐに帰宅するよう促す。
- ・院内のPCで文献検索をする時間を提供する。
- ・あらかじめ大まかなスケジュールを作成し学生に提示しておく。
- ・その日のうちに学生の理解度を確認する。
- ・17時以降の会議に参加してもらうために、他の平日に休みをとってもらおう。CEに合わせて休みをとる、午後に休みにする、など。

感想

この2日間を通して、『私たちが学生の頃とは違う』ということをしっかり意識しながら臨床実習にあたる必要があると感じた。また、作業療法参加型実習は学生の理解度確認や業務の効率化、残業時間の短縮など、学生だけでなくCE側に対しても負担の軽減が図られると理解できた。学生、養成校、指導者全てにおいてメリットの多い変化だと思った。

報告書：演習 7 作業療法参加型臨床実習の理解

グループ 7

世話人氏名：牧山美穂

GW 司会者：今池大樹

記録者：野口歩愛

発表者：大谷幸己

学修目標

見学-模倣-実施の指導方法について、実践場面を想定した演習を行い、作業療法参加型臨床実習の理解を深め、効果的な臨床実習のプログラムを検討し立案する。

発表の要点（キーワード）

1. 事前準備を行う（評価内容の確認、目的、リスク管理）
2. 模倣の時点で、学生がどこまで理解出来ているかの確認する
3. 患者様に実践する前に指導者との復習、練習を行う

グループワークで議論された内容

<MMT 評価場面における見学-模倣-実施を基盤とした指導方法・工夫> (実施)

- ・模倣で出来た評価をどこまで出来ているか（ポイントごとに分ける）
- ・患者さんの状態も確認しながら、学生もみる
- ・痛み等の確認を事前にする
- ・事前準備（模倣時の再確認、リスク管理、患者様の状態など）
- ・実施する前に模倣で行った指導内容の確認。前回の反省点の再確認を行う
- ・病態上の禁忌事項の確認を口頭で行う
- ・不安な所があれば患者に実施する前に復習、練習して実施
- ・実施する前に指導者での練習を行う

<週 45 時間以内という時間の中で効果的な臨床実習を行う工夫>

- ・午前、午後と記録・見学等での質問する時間を設ける
- ・一日の実習の中で学生の意見、質問を聞く時間をこまめに作る
- ・スケジュール表の作成、共有
- ・実習全体の大まかな流れ、予定を最初に学生と共有、確認しておく
- ・1日のスケジュールを建てる（進捗状況に応じスケジュールを変更していく）
- ・小まめにフィードバックを行う
- ・介入する時間と記録や整理をする時間を明確に確保する
- ・一日の目標をたてて行動する
- ・小まめにフィードバックする。
- ・指導者のフィードバックの時間の有効活用（カルテ記載の時間など）
- ・課題ごとに期限を決めて、難しければつど変更していく
- ・指導者の1日の仕事の調整
- ・職場の理解、スタッフの相互協力が必要
- ・学生が持って帰る課題をなくす

感想

一日の実習の中で、指導者も学生も無駄が無いように、午前午後に学生に記録する時間を設ける、こまめにフィードバックを行う等など時間の使い方の工夫や、職場や他スタッフとの協力が必要であるという意見があがりました。学生、指導者ともにより良い実習となるようにコミュニケーションや事前の準備の大切さ、また指導者一人に負担がかからないようにチームや施設の協力も必要だと感じる。

報告書：演習 7 作業療法参加型臨床実習の理解

グループ 8 世話人氏名： 久毛 希

GW 司会者： 橋口裕樹 記録者：松下奈津希 発表者：松下奈津希

学修目標

見学-模倣-実施の指導方法について、実践場面を想定した演習を行い、作業療法参加型臨床実習の理解を深め、効果的な臨床実習のプログラムを検討し立案する。

発表の要点（キーワード）

1. 事前に注意点を確認後見守りのもと実施し、良かった点をフィードバック。
2. 合間の時間にフィードバックし、定時で学生が帰れるようにする。
3. 学生の時間の確保

グループワークで議論された内容

<MMT 評価場面における見学-模倣-実施を基盤とした指導方法・工夫>

- ・見守りをしながら実施（適宜声掛けしその場でフィードバックする）
- ・事前に注意点を学生に言ってもらい理解度を確認または指導者が伝える
- ・目的や基礎知識（筋の起始停止など）を確認した上で実施する
- ・実施後に良かった点などを伝える
- ・フィードバックの際に達成度や効率の良さなど確認する
- ・リスク管理や良かった点を伝える

<週 45 時間以内という時間の中で効果的な臨床実習を行う工夫>

- ・活動の合間にやることを確認していく。
- ・業務時間内に出来ることをデイリーノートなどまとめていく。
- ・調べることなどもまとめておく。自宅での作業の効率化を図る。
- ・学生の見学は 16 時までと決めて、そのあとはデイリーノートのまとめなど学生の時間を設ける。
- ・個室で学生が学習やデイリーノートをまとめる環境をつくっている
- ・訪問リハでは移動時間があるのでその際に話し合いを行っている。
- ・朝の時間に学生が集まる場所を設けて、学生同士でディスカッションを行ってお互いの情報共有をしてもらう。
- ・実習前からスケジュールを立てておく。予定通りに行かない場合はその都度調整する。
- ・体調不良の学生のための配慮として早めに終わらせ、早めのフィードバックをするなど工夫する。
- ・学生優先で終わるようにする。
- ・定時で学生は帰すようにする。

感想

見学・模倣・実施へと移行する際に明確な基準を設けることが必要だと感じた。病院内でも学生が定時で帰れるような工夫がなされていて、以前よりは学生も睡眠が十分とれている印象がある。

報告書：演習7 作業療法参加型臨床実習の理解

グループ 9 世話人氏名：荒木一博

GW 司会者：本田敏也 記録者：荒木知沙、植木百合子 発表者：荒木知沙、秀島沙季

学修目標

見学-模倣-実施の指導方法について、実践場面を想定した演習を行い、作業療法参加型臨床実習の理解を深め、効果的な臨床実習のプログラムを検討し立案する。

発表の要点（キーワード）

1. 対象者の選別や肢位の変化などの応用を指導する
2. フィードバックする時間の取り方を工夫する
3. 早めにアイスブレイクを行い打ち解ける

グループワークで議論された内容

<MMT 評価場面における見学-模倣-実施を基盤とした指導方法・工夫>

実施レベル

- ・なぜ行なっているのかを伝え、対象者の負担とならないようにすること、対象者の状況（リスク面、バイタル面、受け入れやすさなど）を考慮する
- ・対象者の選別、慣れによる態度の変化へのリスク管理が必要
- ・監督しながら定期的なフィードバックを行なう
- ・実施前に要点を確認する（目的、注意点、肢位など）。模倣直後の実施ならなお必要
- ・実施を繰り返したあとは、座位や臥位といった肢位の変化などの応用法を指導する
- ・同じ症例でも異なる点があることを伝える
- ・一部分の介入でも模倣や実施ととらえる場合がある

<週 45 時間以内という時間の中で効果的な臨床実習を行う工夫>

- ・バイザーの時間管理をしっかりと行う
- ・フィードバックを時間内に行う
- ・スタッフと同じ時間に帰れるように書類作成の時間を確保
- ・実習が始まる前に1日、週のスケジュールを決める（修正を加えながら）
- ・実習に集中できるような環境（慣れない環境で時間を要する）
- ・その都度フィードバックを行う
- ・早めにアイスブレイク
- ・他のスタッフとの協力

感想

- ・実施レベルの状態であっても、監視を続けながらリスク管理やフィードバックを継続していき、学生の状態の把握、患者様の状態には常に注意を払っていく必要がある。また、経過（学生のレベル）によっては効率性を図っていく事や応用的な所まで考えていく事が必要になってくると感じた。
- ・限られた時間の中で実習を進めていくためには、明確なスケジュール管理の重要性を感じる事が出来た。また、職場によっては他スタッフの協力が必要不可欠になってくると思われるため、スタッフ間の関係性も重要になってくると感じる事が出来た。

報告書：演習7 作業療法参加型臨床実習の理解

グループ10 世話人氏名： 井戸佳子
GW 司会者：齋藤将司 記録者： 林田万由 発表者：三岳直也

学修目標

見学-模倣-実施の指導方法について、実践場面を想定した演習を行い、作業療法参加型臨床実習の理解を深め、効果的な臨床実習のプログラムを検討し立案する。

発表の要点（キーワード）

1. 別の患者様でも実施できるか確認する
2. 初めにタイムスケジュールを確認
3. 学生の能力を早めに知る

グループワークで議論された内容

<MMT 評価場面における見学-模倣-実施を基盤とした指導方法・工夫>

【実施レベル】

- ・筋の起始停止、手技の確認
- ・リスクを確認する
- ・良かった点、改善点を伝える
- ・代償動作がないか・痛みがないか本人に確認する
- ・学生、患者様の状況に合わせて行う
- ・見学から一通り実施しさらに別の患者様で実施する
- ・患者様が変わると出来ないこともあるので2～3人ほどは実施、確認する

<週45時間以内という時間の中で効果的な臨床実習を行う工夫>

- ・タイムスケジュールの確認
- ・記録の時間、振り返りの時間を就業時間内に行う
- ・評価の期限がきたら指導者が答えを教える
- ・MTDLP 演習シートでの確認もする
- ・学生の能力を早めに知る（ワードやエクセルが使えずレポートに時間がかかったりすることもある）
- ・スケジュール通り動けるよう現場での時間を調整する
- ・実習の初めにスケジュールを渡す
- ・1週ごとに到達度を把握する

感想

通所、訪問では就業時間内での記録・フィードバックは難しいこともあるので学生同士で確認を取ってもらったりすることもある。

フィードバックだけは就業時間内にするようにしているところが多い。

忙しい時期は時間外になってしまう。施設によって工夫している。